

「地域活性化」の本質的方法試論
— 「ふるさと春日井学」研究フォーラム実践の検証—
An Essential Method for Local Revitalization
—Furusato Kasugai Studies in Practice—

河地 清

(平成 28 年 11 月 18 日受付・平成 29 年 2 月 1 日受理)

要 旨 地域振興・地域活性化の基本的考え方とは何か。「ふるさと」概念と「地域創生」「地域再生」とはどのように関連しているのか。従来の「まちづくり」概念と新しい発想による「まちづくり」の発想とはどのように違うのか。「地域活性化」の方法を巡って今日まで多くの先行事例や先行研究が提起されてきている。しかし、定式化した実践や理論は示されていない。従来の経済理論だけでは「地域活性化」の方法を定式化してゆくことは出来ない。特定地域の歴史、文化、自然を総合的な視点で捉える価値観と、地域を構成している人々の内発的意識（ふるさと意識）の醸成の基盤の上で「地域活性化」の問題を考察することが本質的方法ではないかと考えるからである。本論文は、市民活動「ふるさと春日井学」研究フォーラムの実践活動を通じて「地域活性化」の要件となる証言資料、実践的知見、検証等をもとに、「地域活性化」の本質的方法論を試論した実践報告論文である。

キーワード：「ふるさと意識なくして地域活性化なし」
地域活性化、ふるさと学 ふるさと意識の醸成

目 次

はじめに

I. 「地域活性化」と「まちづくり」の方法試論

—視点の転換と新しい発想—

II. 「ふるさと意識」の形成と醸成の変遷

—Sub culture にみる「ふるさと意識」—

III. 市民活動「ふるさと春日井学」研究フォーラムの実践

—「ふるさと意識」醸成運動として—

IV. 「ふるさと春日井学」研究フォーラムの検証と分析

—「地域活性化」への新たな動き—

補論：創造的「まちづくり」論について

—文化施設を活かした「地域活性化」を中心に—

おわりに

はじめに

本論文の目的は、「地域活性化」の方法を「ふるさと意識」の醸成こそが本質的源泉であることを論証することを目的としている。市民活動「ふるさと春日井学」研究フォーラムの実践を通して得た知見を検証しまとめた実践報告論文である。

従来「地域活性化」に関する論考は、経済振興論とマーケティング論を中心とする政策論¹⁾、戦略論、技術論を中心に展開されてきた。そして、経済論的地域振興論としての「地域活性化」方法論についての先行研究は数多くあるが、本論での視点は「ふるさと意識」を「地域活性化」の本質的根源的要素と捉え、「ふるさと意識」と「ふるさと意識醸成」が「地域活性化」とどのような相関関係にあるのかを市民活動「ふるさと春日井学」研究フォーラムの実践を通して得た知見を基に検証し考察する。

今日「ふるさと」の再生、「ふるさと」の活性化が叫ばれて久しい。「ふるさと創世事業」(1988~89年)「まちの活性化事業」等を嚆矢として、地域のことは地域の主体性の中で考えていこうという価値観と従来の中央中心の地域づくりの発想への反省が、真の意味での「ふるさと」再生と活性化はどのようなものかを考える契機を与えてきた。地域に居住する人々の意識のなかにどれほど「ふるさと」意識や「わがまち」意識が芽生え定着しているかは「地域活性化」を図ることと相関関係にあり、最も基本的な条件とならなければならないと考える。

社会経済史的に、高度経済成長期以降、生産と消費を中心とする経済モデルが人間に物質的豊かさと利便性をもたらしてきたことを誰も否定しない。しかし、物の豊かさとそれに反比例して人間の心の貧しさを生みだしてきたことも指摘されて来ている。²⁾「ふるさと意識」の希薄化と文化・歴史資産の劣化、破壊の現象は今日も進行している状況の中で、経済至上主義、市場原理主義は、全ての物の価値を金銭と利潤で

量る価値観と内面的精神をも金銭で押し量るという価値観が日常となってきたことにより企業や一人一人の人間のモラルの中にも古くから守られてきた伝統、習慣、歴史・文化価値に対するハザード現象が急速にすすんでいることも今日的課題となっている。「企業不祥事」「犯罪の低年齢化」「親子関係のミスマッチ」「世界金融危機」等々の現象はこうした倫理観、価値観の変化に起因するところが大きい。物の豊かさと心の豊かさは同時並行的に達成されなければならない。二項の条件が相対立するものであっては真の意味の「富」＝「豊かさ」とは言わないからである。そこで、「ふるさと意識」を考えることの意味は、まさに「心の豊かさ」とは何かということを考えることでもある。「ふるさと」＝「地域」の活性化は経済的活性化と精神的活性化の両面を伴わなければならない。その意味において、生産と消費による地域の経済的活性化に伴って文化と歴史資産の活用が加わることによって、地域の生活者に精神的潤いと誇りをもたらす新たな価値創造が生まれる。地域活性化は、どの地域にもある歴史遺産(heritage)を現代の資産(property)とするという発想(heriperty)が新しい「まちづくり」の方法であるという視点が求められている。文化とか幸福を地域社会の目標とし、伝統や文化を自信を持って発信し、生活している人々が幸せを感じることでできる都市(地域)環境をつくっていくことである。³⁾ そのためには、一度失ったらもう創り出すことができない文化財の保護・保存につとめ、千数百年の文化を大切にすることは勿論のこと、今を含む歴史を大切にすることを重視することでもある。たんなる地方の個別的、史的研究にとどまるのではなく、地方(地域)の改良(活性化)の学でなければならない。因って、「地域活性化」は、経世済民、自力更生＝地域活性化の学＝「ふるさと学」でなければならない。⁴⁾ (傍線は筆者)

「ふるさと意識」とは、真に、定着して居住する住民の意識の中に歴史遺産や伝統的文化に

根付いたふるさと意識やわがまち意識とそれらの価値を享受する能力を持ち、その土地に愛着をもつものでなければならない。地域が時代の変化に安易に流されていくことは、精神的な歴史資産までもが失われていってしまうことになるからである。従って、「地域活性化」の学としての「ふるさと学」のもつ役割は、地域についての誇りや愛着に裏付けられた風土、伝統、歴史、文化、産業などの総合的領域から成る知識研究を「ふるさと意識」の醸成に活用されて行く道筋を体系化することである。その中で「地域活性化」が進められることが必要だと考える。従って「ふるさと意識なくして地域活性化なし」が「地域活性化」の大前提とならなければならないと考える。

I. 「地域活性化」と「まちづくり」の方法試論

—視点の転換と新しい発想—

「地域活性化」という用語の使用は、経済の振興と経済の好循環のモデルを如何に創り出すかということを中心とした視点で用いられてきた。しかし、「地域活性化」の方法と理論は単に経済論だけではなく、多様であり必ずしも明確化されているわけではなく定式化された方法論はないといってよい。今日までの多くの実践例は所謂「まちづくり」という範疇の中で総合的、包括的に論じられて来ている。それは、経済を中心とした技術的、戦略的、政策論的な議論を中心とした論考として先行研究のなかで多く示されてきている。しかし、地域研究を「ふるさと」概念と「ふるさと意識」の中で捉えた論考は決して多くない⁹⁾

「地域」の概念は、視点、論点によって様々ではない。communityとして捉える社会学的視点での「地域」論、地理的なareaとしてとらえ、歴史、風土、自然、気候の範疇でとらえる「地域論」、地域経済としてとらえる経済論的視点での「地域論」と多様である。

言葉の表現としてはlocalまたは、regional

と言っている。学術的には、「地域研究」(Regional Study, area)と言っている。本論で敢えて「ふるさと」=「FURUSATO」の語義を用いる理由は、その地域で地を這うようにして生活している人間の「想い」「愛着」「誇り」「Identity」といった人間の意識形成の根源となる五感から発せられる体温を感じる人間の精神的内面からほとぼしり出るethosを読み取ることが重要であると考えからであり、個々の人間の生業、喜怒哀楽、家族、友垣、地域社会との絆と言った多様な人間関係を踏まえて分析する必要があるからである。「ふるさと」という語義の中には、個々の人間の生活そのものが詰まった言葉として最も身近で親しみのある生活の原点を示す民衆史としての意味合いを重視する必要があると考えるからである。無機質な理論や法則的な概念よりも、実践的で市井の人々の身近な言葉の中に現実的で説得力に富む真の意識がある。「地域研究」=「ふるさと」研究は論理よりもその地域に生活する人達の精神的内面と向き合い近づいて行くことなかから「地域づくり」=「まちづくり」の方法論が創り出されていかなければならないと考えるものである。

以上のことを踏まえて「ふるさと」の概念を以下のように整理しておきたい。

狭義の「ふるさと」概念は、郷土, home country/ home town /as our home = 「わがまち」意識 故郷 (ふるさと) の語義で示される。限定された狭い地域 (area) を示す。そして、「愛着」「誇り」「Identity」が強く感じられる場所 (space) のことを言う。「ふるさと」とは、故郷の土となり塩となってゆく気概、それは地域に生きる一人一人の人間にこそ芽生えるものであり、故郷を愛する精神こそが歴史を創り出して行く源泉となる場所のことである⁹⁾

広義の「ふるさと」概念は、具体的には地方 (local) / 地域 (legion) を示し、「豊かで安心・安全な生活空間を創る」場所 (space) の全体を指す。その方法と理論を研究する総合領域を含む学が「ふるさと学」=「地域活性学」

であり、地域創生の対象となる場所（space）を言う。

新しい「地域活性化」の発想は、従来の経済成長ビジネスモデルや一極集中型社会モデルの視点からの発想ではなく、その発想から脱却して個々の人間の精神的内面からわきでてくる文化、歴史、芸術、伝統、自然の中から新たな価値を創造し、その価値から経済的効果を創り出してゆこうとする価値観への転換を示すものでなければならない。その意味で、今日地域の人々を育み、培われてきた風土・環境を基盤としてその中で長い間掛かって醸成されてきた意識を再び蘇らせ、再生させ、「ふるさと」の再発見の作業を地域の生活者＝市民が主体的で自生的な取り組みとして実践することが「地域活性化」の重要な鍵を握ることになるのである。「ふるさと」の魅力、特色、誇り、Identityとなっている全ての領域（自然、歴史、文化、芸能、芸術）にわたって、それを、保存、保護、継承していく実践と、ただ単に個別の学習に完結してしまう所謂従来型の「生涯学習」の範囲にとどまるのではなく意識の醸成をよりすすめることのできる「生涯研究」への枠組みをつくることが重要な課題となって来ている。⁷ 今日「ふるさと創生」（1988～89年）「地方創生」（2015年～）「クールジャパン」「文化芸術創造都市」⁸などの「地域活性化」のスローガンが並ぶのは、社会の構造変化とともに新しい意識の変化を現す現象の一端と言える。しかし、どんなに言葉が変わっても、ロゴやキャッチフレーズが付けられても、本質的な意識の変化がなければそれは、過去の繰り返しであり、従来の硬直化したモデルの焼き直しを繰り返すことに他ならないのである。意識の変化は従来の価値観の変化であり、新しい価値観の創造でなければならないのである。

「意識が変われば行動（規範）が変わる」は人間行動原理の本質であることを前提にしたとき、「ふるさと意識」の醸成は、地域に生活している人達が生活の場に「愛着」「誇り」「Iden-

tity」を持つことを創りだして行く実践であり、それは、自らの生活の場を「知る」・「識る」ということに繋がることである。それは、学校教育、家庭教育、社会教育（生涯学習）、企業教育等様々な場所・機会が活用されなければならない。そうした「ふるさと意識」醸成と涵養の仕組みが産学官民の協働で作上げられれば、自ずと地域の人達は地域の為に「何をすればよいか」「何が問題か」「何とかしなければ」という意識をもって実践してゆくはずであるし、してゆかなければならないと考える。

「地域再生」「地域活性化」の取り組みの実践が行われるためには、その地域に生活する当事者の意識の中に所謂「ふるさと意識」がどれ程存在しているかが鍵を握っていると言ってもよい。地域の人が自発的に「こうしたい」「なんとかしなければ」という答えがなければ、やる気も、モチベーションも、実践も軌道には乗らない。もちろん、実践の持続性も保証されない。つまり、「地域活性化」の実践は、あれこれと条件、要件が整うのを待って行うことよりもまず始めるという「意識」ある人達による「意志」＝「情熱」が重要であるということが言える。⁹ 以上のことを踏まえて考えれば、「地域活性化」「まちづくり」の事業は、優れて実践的、実験的な課題であり、試行錯誤の連続であり、そこには、こうすればこうなるという理論的に定式化された方法というものは見あたらないが、「ふるさと意識」醸成の実践は、まず、当事者である地域の生活者に「ふれあい」「融け込み」「馴染む」「根付く」といった多様な関係性を構築して行き、その実践の中から創造的発想と提案が生み出されて行くことが重要であると考えられる。その前提なくして真の意味での「地域の、地域による、地域のための」「活性化」「まちづくり」は出来ないということが言える。故に「活性化」「まちづくり」は「理論より実践」であると言えるのである。

以上のことを踏まえて、市民活動「ふるさと春日井学」研究フォーラムの実践を通して「ふ

るさと意識」の醸成を図る活動を通じて「地域活性化」と「まちづくり」をすすめる実践を試みてみた。

「意識が変われば行動（規範）が変わる」ための従来の意思決定の基本的経路を示すと以下のような図式になる。

「まちづくり」概念としての「ふるさと春日井学」研究フォーラムの実践は、春日井市域を中心として「ふるさと意識」がどのように醸成されていったか、又いるかを見るための実証実験＝社会実験として行なっているものであり、そのことによって、どのようなベクトル（vector）が生まれたかを検証した。

その前に「まちづくり」の具体的な参考事例として、「ふるさと意識」の醸成とその「仕組みづくり」を結実させた先行事例を見てみたい。¹⁰⁾

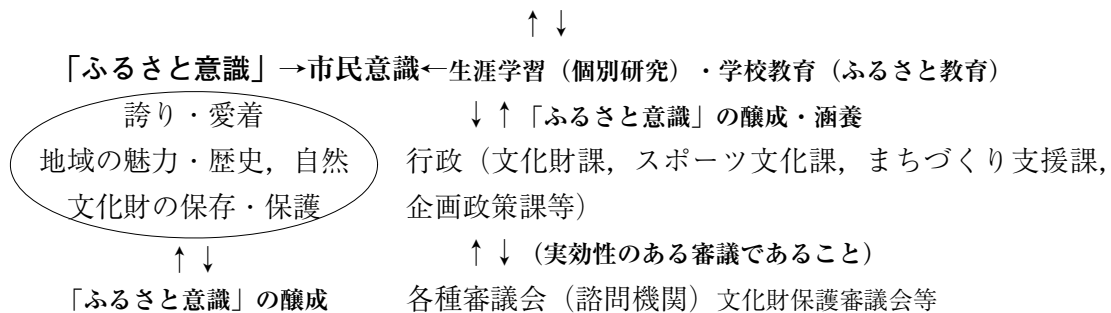
滋賀県近江八幡市の「地域活性化」の取り組みに関する実践例を挙げる事ができる。

『「地域活性化の方法と実践～近江八幡市のふるさと学習の実践～』と題した安部耕作氏の講演を聴いた。スライド数 66 の印刷物が配布された。安部氏は近江八幡市教育委員会生涯学習課主査の肩書、社会教育職員 10 年の経験からの報告であった。近江八幡市は人口 8 万 2

千人の小さい市であるが、近江商人と水郷で知られる。2010 年 3 月に合併した安土町は安土城で有名。その水郷の地も 1965 年頃には水上輸送がなくなり、水の流れが止まると金魚藻が川面を埋め尽くし、ハエ・蚊の発生、悪臭が漂い、埋め立て問題が起きる。スライドには 1973（昭和 48）年の八幡堀の写真が映し出された。次に「現在の八幡堀」の写真が生まれ変わった様子を紹介された。1975 年、熱心な市民活動が埋め立て工事を中止させたことで八幡堀は再生した。西の湖、長命寺川周辺のヨシ地を含む「近江八幡の水郷」と古い町並みが残る「新町通り」の景観も「伝統的風景ゾーン」として甦り、小さな市ながら、観光客は 2005（平成 17）年には年間 246 万人も集まった。これらの「成果をもたらした力」は何であったのかがこの報告の主眼である。もともとこの地は安土桃山時代の武将豊臣秀次（1568-95、近江 48 万石、秀吉の甥、母は秀吉の姉日秀、秀吉の長男鶴松の死後、その養子になり関白に、次男が生まれると高野山に追放され、自殺を命じられたが八幡城を建て、碁盤状の城下町を建設したところ。中山道 69 番目の宿場「武佐宿」が置かれた歴史あるところ。八幡堀は外堀であるが、城作りでは資材を運ぶ運河であった。地域には自然・

「ふるさと意識」を基本とした意思決定の経路

（地域・組織のリーダーと市民の意識が変わることが重要）



地域（商店街）・生活者（消費者）

各種市民団体（NPO 含む）地域コミュニティー（町内会・自治会）

商工会議所（企業・事業所）・観光協会等

（※春日井市の現在の行政組織を参考に加工作成した。）

伝統・文化がつまった景観があり、それが地域の魅力を高める要素だ。(風景計画担当者のコメント, 51枚目のスライド) 景観計画の策定を通して、行政も住民も自分たちの地域の文化や伝統を見直すことができたとのコメント。「ふるさと学習」では集合学習での初期段階、まちづくり実践段階には相互学習、個人学習で補完するプログラム。2004(平成16)年6月公布, 12月に施行, 2005(平成17)年6月1日完全施行の景観法は、従前の都市計画法, 建築基準法などによる美観地区, 風致地区, 伝統的建造物群保存地区(歴史的町並保存地区), 屋外広告法, 古都保存法などでは、地方自治体が独自の景観保護条例を制定しても財産権を規制する国法がなく, 規制力のない「行政指導」とどまったことから法整備されたものだ。市や県は景観行政を行なう景観行政団体として, 公聴会など住民の意見を反映させる手続きを経て, 良好な景観の形成に必要な「景観計画」を定め, 景観区域内の行為の制限ができることになった。行政側の権限と同時に住民や事業者, 国の責務も求める。そういう新しい景観の保全と形成の仕組みができる中で, 近江八幡市は独自の方式を模索する。「八幡堀の再生」を近江八幡市のまちづくりのシンボリック活動と位置づけ, 市民活動の役割と小学校での郷土学習の題材とする「ふるさと学習」(教材『わたしたちの近江八幡』の活用)にも取り組む。景観法が施行された時の市長は川端五兵衛氏(在任1998-2006年)であったが, 住民を説得する言葉に「リーダーかくありき」¹⁴⁾と聞く人の共感をよんだ。伝統的建造物群指定で家屋に制限がかかることを渋る住民に対して「あなたがたはこんなすごい所に住んでいる。なぜそれがわからないのか」と説得したという。自分のまちのすごさに気づかない。まずは住民にそれを気づかせる。外の人に自分のまちをほめてもらう。そのことで自分のまちのよさに気づき, 自信になるとまちづくりを学んだという公民館長のことばが紹介された。(スライド33)独自の方式とは、「景

観計画」ではなく「風景計画」といい, 「景観づくり」と呼ばず「風景づくり」, 「風景づくり委員会」を「景観協議会」に位置づける。これまでの経験を生かし, 2005年3月, 景観法に基づき, 近畿で初の景観行政団体となり, 同年4月「風景づくり条例」を施行。全国初の景観法に基づく「景観計画」としての「水郷風景計画」(9月)「伝統的風景計画」ができた。」

以上の報告から, 「ふるさと意識」なくして地域の活性化なしの典型的な実践例であることが解る。

この事例で解ることは, 川端五兵衛氏が, 「地域活性化」のkey personであったことである。市長の職にあったことによる意思決定の迅速さも好条件であったことである。氏が青年会議所の若き一会員であった頃まで話は遡る。20年前頃の八幡堀はメタンガスとゴミの堀池であった。地域の住民の強い要望で, 堀を埋め立て駐車場にするべく, 国土交通省の助成金も請けて, 工事は始められた。しかし, この地に, 愛着と誇りをもった氏を中心とした市民は, 工事にかまわずゴミの清掃, 水の浄化作業を行い続けその輪は大きな広がりを見せていくようになった。ついには, 工事業者までが手伝うようになったというエピソードも伝わっている。正に「ふるさと意識」に支えられた市民活動は, 公共事業をもストップさせてしまう状況をつくりだしたのである。意識が変われば行動(規範)が変わり, 行動が変われば状況(環境)が変わって行く典型事例ではなかつただろうか。行政の長となった川端氏に強い「ふるさと意識」が根底にあったことも「まちづくり」の速度を速めた重要な要因であり, 事実ではあるが, それを支えた地域の人々の強い「ふるさと意識」への覚醒が原動力になっていることが読み取れる。そして, こうした「ふるさと意識」の醸成機能を行政サイドである市の生涯学習課が中心となった行政組織が地道に枠組みを構築整備し, 市民の「ふるさと意識」醸成の環境づくりをしていったことが「地域活性化」の成功の鍵を握ってい

たことが読み取れる。「ふるさと意識」の実践の中から具体的な方法が創り出されてきたプロセスがよく解る事例である。故に「地域活性化」の本質が「ふるさと意識」に基づくものでなければならない理由がここにあることを実証された事例として重要であり、今後の「まちづくり」「地域活性化」の基本的なモデルとして参考にしてゆくべき事例であると考える。

地域の歴史・文化を地域の価値（遺産 **heritage**=資産 **property**）として活用する新しい発想による「地域活性化」の **model case** である。

II. 「ふるさと意識」の形成と醸成の歴史の変遷

—Sub culture を中心に—

「ふるさと意識」の形成を思想的系譜を史的に概観するなかで考察を試みた。従来、「ふるさと」概念は郷愁 (**nostalgia**) と情緒的な感傷 (**sentimental**) の概念として捉えられ多くを **sub culture** の領域の中で語られてきていた。多くの「都市論」, 「経済論」の中では、その土地に生まれて地を這うようにして生活し、その郷土（ふるさと）に一生懸命尽くして、途中、何年かは都会へ出たりして修行はしても、帰ってきて、その故郷（ふるさと）の大地の塩のようになっていった民衆文化の担い手となって地域に貢献している人間の姿のなかに見る真の「ふるさと意識」を論ずるものは少なかった。ある土地に生まれて、ただ学校だけ出て、後は他郷で一生を終わる。功なり名を遂げ、二度と故郷には帰ってこないで、立身出世街道をひた走った人達からは真の「ふるさと意識」は見いだしにくい。¹²⁾

視点を変えて「ふるさと意識」の変化を近代社会成立後の明治時代から今日までの **sub culture** である「歌謡史」¹³⁾の歴史の中に読み取ることが出来ないか、試みてみた。「ふるさと意識」を見いだそうと試みるその理由は、地域に根ざした民衆の心（意識）を最も「わかりやす

く」表現しているからであり、歌唱、歌詞の中には、その時代、時代の人々の「ふるさと」に対する哀愁、望郷、回帰の情念と、強い **sympathy** が表現されているからである。従って、「ふるさと」をテーマとした「歌」の変遷を見ることによって、その時代の「ふるさと意識」の変遷の状況と、人々の心に「ふるさと」がどのような形で定着していたかが垣間見えるからである。学術的ではないという批判もあるが敢えて違った視点からの挑戦を試みた。

経済史的視点から見たとき、資本主義経済社会の枠組みの中では、経済的価値のみが社会的価値であり、資本、資産のみが人間生活の価値尺度の原則であることは資本の法則が示す経済理論として、自明の理である。従って、本来の経済活動以外の「文化」「芸術」は人間生活のなかでは経済的に価値ある物として受容されてこなかった歴史がある。しかし、こうした経済原理を『資本論』のなかで科学的に分析した **K.H.Marx** (1818~1883) と同時代人であった **J.Ruskin** (1819~1900) は、『芸術経済論』¹⁴⁾のなかで、人間社会の中における価値は経済的価値（市場価値）だけではなく、「文化」「芸術」にも人間生活の中で享受できる「価値」（実効的価値）があるのであり、その価値の中にある創造的価値こそが人間の生活を豊かにしてゆく一つの手段であることを主張し、人間は、そうした価値ある「文化」「芸術」を受容する能力（意識）を養うことによって生活の豊かさを獲得することができるのであると述べている。この時代ラスキンの考えは時代に受け入れられてはこなかった。しかし、今日では「文化経済学」¹⁵⁾の基本的原理となっており、従来経済的価値ある存在として認められて来なかった歴史・文化・芸術等に経済的価値を見出し活用する新しい「まちづくり」「地域活性化」を考える上での欠くことの出来ない理論的支柱となっていることは言うまでもない。

今日的課題は、経済至上主義、市場原理主義¹⁶⁾、強欲資本主義¹⁷⁾の社会の中で少子化、地方消

減¹⁸⁾、格差社会¹⁹⁾、デフレ経済と言った社会経済環境は、視点を文化、歴史、芸術、自然の中に新たな価値を見出しどのように経済効果を生み出して「地域活性化」「地域再生」「地方創生」「まちづくり」を進めて行くかと言うことに発想を転換してゆくことに気づき始めた時代と言っても良い。その意味において、「ふるさと意識」の醸成活動は、地域の新たな価値（魅力・特色）を再発見することであり「地域活性化」を考えていく上での基礎的な作業が行われなければならないと思っている。

そこで、「ふるさと意識」と「地域活性化」が社会の変遷とどのような相関関係のなかで推移してきたのかを日本近代化の転換点でもあった明治維新以降から今日までの約 150 年間で時系列的に〈表 1〉「ふるさと意識」の変遷年譜表で概観し、「ふるさと意識」の変遷を Sub culture（歌謡史）の中に見てみた時、民衆の「ふるさと意識」の存在形態が垣間見える。

「年譜表」の傍線を付した項目に注目してみると地域意識（ふるさと意識）の変遷とその時代の民衆の「ふるさと意識」の捉え方が「流行歌」（はやり歌）の中に表現されている。所謂「はやり歌」は、意図的にその時代の民衆意識を表現している民衆文化であると位置づけられるものである。しかし、あくまでも芸能文化のジャンルとしての Sub culture として学術的観点からは、それほど重要視されてこなかった。

理論構築の手法としては亜流であるとの批判が根強くあったが²⁰⁾、しかし、それは人間の精神性「意識」を分析検討してゆく場合に無視できない分野であることも事実である。何故ならば、「歌唱」「詩」のなかに、人間の精神的内面を吐露し、真実を表現している内容は多いからである。

明治維新以降、所謂近代化して行く社会のなかで地方（地域）の人々が主権意識をもち地域のことは地域で解決して行こうという意識の重要性を啓蒙したのは福沢諭吉の著した『分権論』であった。しかし、その意識が広く浸透し

て行くまでの道のりの遠いことと難しさを『権力という「利刀」を渡された「小児」が、其自ら懲り自ら慣るゝの日を待つの一法あるのみ²¹⁾』と述べ人々の地域意識への覚醒には時間の掛かることを予言していた。この地域においても 1879（明治 12）年に愛知県第一回県会議会が開かれた折、東春日井郡選出林金兵衛²²⁾（現春日井市上条町）は、「郡区吏員公選ニスベキ建議」を発議し、地方行政の主権を地域に委ねる様訴える論陣を張っている。これは、金兵衛が「春日井郡地租改正歎願運動」で地域の村落を代表して東京の地租改正局へ歎願に赴いた折、福沢諭吉との出会いがあったことで福沢から多くのことを学び影響を受けたことによるものであった。「地方分権」意識はこの時のものである。この時代、地方への主権意識は確実に浸透していたことを伺わせる出来事であった。また、疲弊した村落の「活性化」を指導した『儉約示談²³⁾』も福沢の草案に基づく村落再生の再建策であることを考えれば地域のことは地域で自力更生してゆこうとする意識は芽生えていたことがこの地域の歴史の中で読み取れる。

その後約 140 年が経過した今日、1999（平成 11）年、地方分権一括法成立・2008（平成 20）年、「ふるさと納税」・2014（平成 26）年、地方創生事業始まる・富岡製糸場世界文化遺産登録・2015（平成 27）年、明治維新産業遺産世界文化遺産登録等々「地域」「地方」「ふるさと」意識に関わる社会の変化は著しい。その意味で、社会の動向は、ようやく福沢の言う地方分権＝「ふるさと意識」が自覚される時代になったことを意味しているのであり、途上に就いた感があるといってもよい状況にあるのではないだろうか。

「ふるさと」に関する夥しい数にのぼる「歌」＝「流行歌」のなかに民衆の「ふるさと意識」がどのような形で表現されているのだろうか。歌い手が歌唱する「歌」「歌詞」の中に「ふるさと意識」と思われる心情や情景が表現されているだろうかを見て行くことによって、その時

〈表1〉「ふるさと意識」の変遷年譜表

※『近代日本総合年表』1968年（岩波書店）より春日井市域を中心に加工作成した。

社会・経済事情		1945 (昭和 20)
1868 (明治 1)	王政復古布告 封建制諸制度の撤廃 明治と改元	3/12・3/24・3/25・5/14・5/17・8/14 空襲 8/15 終戦 GHQ 統治 民主化政策始まる
1871 (明治 4)	7. 廃藩置県 (開拓使・3府 302 県) 7/1 勝川郵便局開設	1946 (昭和 21) 復興経済始まる
1872 (明治 5)	2. 壬申戸籍完成 2. 福沢諭吉『学問のすすめ』刊行 7/1 内津局郵便開設	1950 (昭和 25) 朝鮮戦争 特需景気 5/30 文化財保護法制定
1876 (明治 9)	4/1 坂下局郵便開設	1956 (昭和 31) 水俣病発生 (日本窒素)
1877 (明治 10)	福沢諭吉「分権論」発表『権力という「利刃」を渡された「小児」が、其自ら懲り自ら慣るゝの日を待つの一法あるのみ』	1958 (昭和 33) 1. 高蔵寺・坂下町合併 人口 7 万人 新潟水俣病 (昭和電工)
1878 (明治 11)	10/25 春日井郡地租改正反対運動～12/2 始まる 三新法公布	1959 (昭和 34) 9/26 伊勢湾台風
1879 (明治 12)	愛知県第一回県議会開く 東春日井郡選出林金兵衛 「郡区吏員公選ニスベキ建議」発表	1960 (昭和 35) 所得倍増計画 (池田勇人内閣)・高度経済成長・消費経済
1880 (明治 13)	12/8～5ヶ年「飢餓示談」の実践 (42ヶ村) 6.30 天皇巡幸下街道通過	1961 (昭和 36) 四日市ぜんそく発生 (三菱油化他)
1881 (明治 14)	明治 14 年政変 (国会開設の勅諭) 3/1 林金兵衛死去 (57 歳) 4. 嫡子国太郎交詢社入社	1962 (昭和 37) 東京都人口 1000 万人突破 貿易の自由化
1884 (明治 17)	3/15 地租条例公布 前田正名「興業意見」での在来産業優先を主張	1963 (昭和 38) 6. 黒部第四発電所完成 10. 東海村で原子力発電開始 11. 日米宇宙テレビ中継実験成功
1885 (明治 18)	松方アフレによる不況～ (米価下落、地租負担、自作農没落)	1964 (昭和 39) 10. 東京オリンピック・東海道新幹線開通 9. カラーテレビ放送開始
1888 (明治 21)	♪「故郷の空」流行	1965 (昭和 40) ♪「あゝ上野駅」(井沢八郎) 流行
1889 (明治 22)	2/11 大日本帝国憲法公布	1966 (昭和 41) 第一回赤字国債発行 中国文化大革命～76
1890 (明治 23)	5/17 府県制郡制公布 10/30 教育ニ関スル勅語公布	1967 (昭和 42) 資本自由化実施・公害対策基本法公布
1891 (明治 24)	12/18 田中正造 足尾銅毒事件について衆議院へ質問状提出 10/28 濃尾地震	1968 (昭和 43) 6. 文化庁設置 イタイイタイ病提訴 (三井金属鉱山)
1892 (明治 25)	前田正名「地方産業振興」「町村是運動」の実践始める	1969 (昭和 44) 1. 東大安田講堂に機動隊導入 5. 東名高速道路全通
1894 (明治 27)	8. 日清戦争～28 5. 中央線敷設正式決定 (第六回帝国議会)	1970 (昭和 45) 大阪万国博覧会
1899 (明治 32)	横山源之助『日本の下層社会』出版	1972 (昭和 47) 日中国交回復 高度経済成長時代終わる
1900 (明治 33)	2.11 福澤諭吉修身要領 29 条示す、井上哲次郎批判 7. 中央線開通 (名～多)	3/26 高松塚古墳壁画発見
1901 (明治 34)	2.1 福澤諭吉没 (68 歳) 10.23 田中正造衆議院議員辞 12.10 鉱毒事件で天皇直訴	1973 (昭和 48) 2/13 円変動相場制 10. 第一次オイルショック ♪「ふるさと」(五木ひろし) 流行
1902 (明治 35)	扇風機・腕時計の流行、東京市人口 169 万人	1975 (昭和 50) 3/10 新幹線岡山～博多開通
1903 (明治 36)	『職事情』(農商務省編集) 下街道坂下を中心に製糸業繁栄 (～昭和 10)	1976 (昭和 51) 文化財保護審議会「重要伝統的建造物群保存地区・妻籠宿他 7ヶ所指定」
1904 (明治 37)	日露戦争～38	1977 (昭和 52) ♪「北国の春」(千昌夫) ♪「案山子」(さだまさし) 流行
1906 (明治 39)	西園寺内閣「神社合祀令」南方熊楠「神社合祀令反対運動」柳田国男支援	1978 (昭和 53) 12. 第二次オイルショック 稲荷山古墳出土哲剣文字 115 字確認
1907 (明治 40)	♪「故郷の廃屋」流行	1982 (昭和 57) 5. 高蔵寺ニュータウン完成
1910 (明治 43)	第一歌集 (一握の砂) 初版 (石川啄木)	1988 (昭和 63) ふるさと創生事業・地域意識・地方分権意識 「地方の時代」
1912 (大正 1)	7/3. 崩御 (61)「真の文明とは山を荒らさず川を荒らさず村を破らざる人を殺さざるべし」(「田中正造」日記)より	1989 (平成 1) 1. 崩御 (87) 2/23 吉野ヶ里遺跡確認
1913 (大正 2)	護憲運動 ♪「故郷を離るる歌」流行	1990 (平成 2) バブル経済～ 生涯学習振興法 (6月)
1914 (大正 3)	8. 第一次世界大戦～18.11 常小学校唱謡歌 ♪「故郷」うさぎ追いかの山・・・	1991 (平成 3) ソヴィエト社会主義連邦共和国崩壊
1916 (大正 5)	「故郷は遠きにありて想うものそして悲しくうたうもの」(室生犀星)「小景異情」	1995 (平成 7) 1/17 阪神淡路大震災 日本長期信用銀行、山一証券、拓殖銀行破綻
1917 (大正 6)	ロシア革命	1996 (平成 8) バブル経済の終焉
1918 (大正 7)	8/2 シベリア出兵 9. 第一次世界大戦終結	1997 (平成 9) デフレ経済の始まり
1921 (大正 10)	魯迅『故郷』発表	1998 (平成 10) 6/3 中心市街地活性化法 大規模小売店舗立地法 TMO
1923 (大正 12)	9/1 関東大震災	1999 (平成 11) 地方分権一括法成立
1925 (大正 14)	『女工哀史』細井和喜蔵 出版	2001 (平成 13) 9/11 アメリカ同時多発テロ発生 4. 春日井市特例市となる人口 30 万人
1926 (昭和元)	12. 崩御 (48)	2003 (平成 15) 3/20 イラク戦争～10.8/31 平成市町村大合併 (～, 05)
1927 (昭和 2)	上野～浅草地下鉄開通	2004 (平成 16) 4/1 地方分権一括法施行 4/1 都市計画法
1929 (昭和 4)	10. 世界恐慌始まる 島崎藤村「夜明け前」 小林多喜二「蟹工船」	2008 (平成 20) 4「ふるさと納税」 5/23 歴史まちづくり法「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」
1930 (昭和 5)	郷土教育盛んになる。柳田国男「郷土生活の研究法」発表	2009 (平成 21) リーマンショック 世界金融危機
1931 (昭和 6)	農村不況の深刻化 9/18 柳条湖事件 (満州事変)	2010 (平成 22) 世界経済危機
1932 (昭和 7)	10. 満州開拓団出発	2011 (平成 23) 東日本大震災・福島第一原子力発電所事故 (3/11)
1937 (昭和 12)	7/7 盧溝橋事件・日中戦争	2012 (平成 24) 8. ロンドンオリンピック 10・第二次安倍政権発足
1939 (昭和 14)	陸軍工廠建設 (鳥居松・鷹来・西山・高蔵寺)	2013 (平成 25) 9/8 東京オリンピック開催決定 (2020 年)
1941 (昭和 16)	12/8 第二次世界大戦～45.8/15	2014 (平成 26) アベノミクス 地方創生事業始まる 富岡製糸場世界文化遺産登録「地方消滅」(増田寛也) 刊行 赤崎、天野、中村氏ノーベル物理学賞受賞
1943 (昭和 18)	6/1 春日井市 (鳥居松村・勝川町・篠木村・鷹来村) 誕生	2015 (平成 27) 明治維新産業遺産世界文化遺産登録 大村氏ノーベル生理・医学/岡崎氏物理学賞受賞 ♪「ふるさととは今もかわらず」(新沼謙治) 流行
1944 (昭和 19)	12/22 空襲 (鳥居松地区)	2016 (平成 28) 7/13 天皇陛下生前退位意向 7/17 国立西洋美術館世界遺産に登録 下街道「四九の市」閉鎖 (鳥居松本通り商店街)

代の「ふるさと」への「意識」を抽出することができないだろうかと考えた。こうした、Sub culture の中にその時代の「意識」の変遷を見てゆくことは「ふるさと意識」を検証する上で一つの分析手法ではないかと考える。

以下、明治から現代までの「ふるさと意識」を表現した歌詞の中から、「ふるさと意識」がどのように変遷してきたのかを社会経済的動向との中で時系列的に概観してみる。

1891 (明治 24) 年、田中正造「足尾鉍毒事件」について衆議院へ質問状提出・1901 (明治 34) 年 12.10 鉍毒事件で天皇直訴・1906 (明治 39) 年、西園寺内閣「神社合祀令」南方熊楠「神社合祀令反対運動」柳田国男を支援する・1912 (大正 1) 年「真の文明とは山を荒らさず川を荒らさず村を破らず人を殺さざるべし」

(田中正造日記) これらの社会背景は、日本資本主義経済発展の過程の中で行われてきた自然破壊、生活破壊の歴史の一端を示すものであった。田中正造、南方熊楠、柳田国男等は共通の自然観をもち、それに基づいて、それぞれの立場で自然と地域の人々の生活権利を守る活動をしたのである。生活の原点である「ふるさと」の自然が破壊されて行く危機感をもつに至る時代背景があったのである。共通していることは、強烈な「ふるさと意識」の表現であり、今日の地域意識、地域主権の思想的系譜に繋がる原点ともいべきものである。この時代の「ふるさと意識」を端的に表現している歌として次のようなものを挙げることができる。

- ① 1888 (明治 21) 年「故郷の空」(スコットランド民謡 大和田建樹 訳詞)「♪夕空はれて 秋風吹き 月影落ちて 鈴虫鳴く 思えば遠き 故郷の空 あゝ我が父母いかにおわす」(傍線筆者)
- ② 1907 (明治 40) 年「故郷の廃屋(家)」(ウイリアム・アイス 作曲 犬童球溪作詞)「♪幾年ふるさと 来てみれば 咲く花鳴く鳥 そよぐ風門辺の小川の ささやきも なれにし昔に 変わらねど あれたる我が家に 住

む人絶えてなく」(傍線筆者)

- ③ 1910 (明治 43) 年 石川啄木「一握の砂」「ふるさとの山に向かいて言うことなしふるさとの山はありがたきかな」「ふるさとの訛りなつかし停車場の人ごみの中にそれを聴きにゆく」(傍線筆者)
- ④ 1913 (大正 2) 年「故郷を離るゝ歌(さらば故郷)」(ドイツ民謡 吉丸一昌作詞)「♪園の小百合なでしこ 垣根の千草 今日は汝眺むる 終わりの日なり 思えば涙 膝をひたす さらばふるさと さらば ふるさと ふるさとさらば」(傍線筆者)
- ⑤ 1914 (大正 3) 年「故郷(ふるさと)」(高野辰之 作詞 岡野貞一 作曲)「♪兎追いし かの山 小鮒釣りし かの川 夢は今もめぐりて 忘れがたき ふるさと」(傍線筆者)
- ⑥ 1916 (大正 5) 年 室生犀星「小景異情」「故郷は遠きにありて想うもの そして悲しくうたうもの」(傍線筆者)

等々を挙げるができる。外来の曲に歌詞を付して歌っているが、歌詞が「ふるさと意識」を表している重要である。この時代の「ふるさと意識」に共通するものは、「望郷」と、「懐古」の念に覆われた内容のものが多い。このことは、社会経済構造＝日本資本主義経済確立期から世界へ拡大膨張して行く経済社会の変化の中で個々の自己努力だけでは「ふるさと」に定着することが許されない時代背景を映し出している。1930 (昭和 5) 年、柳田国男によって「郷土生活の研究法」の発表により郷土教育が盛んになり「ふるさと意識」の醸成が行われたが、変貌して行くふるさとの姿に絶望し、どうにもならない閉塞感、空虚感、哀愁が「忘れがたきふるさとの意識」として人々の意識形成に定着していったのではないと思われる。こうした「ふるさと意識」は、戦後復興経済期(1950年代)頃まで続く。経済発展の一方で「ふるさと意識」崩壊の歴史も垣間見られる。

戦後の社会経済動向は、1956年水俣病発生(チッソ)・1958年新潟水俣病(昭和電工)・

1961年四日市ぜんそく発生（三菱油化他）・
1968年イタイイタイ病提訴（三井金属鉱山）・
2011年東日本大震災・福島第一原子力発電所
事故等々、戦後復興経済期（～1959年）・高度
経済成長期（～1972年）・バブル経済（～1998
年）・デフレ経済期（～2016年）・デフレ経済
脱却期（2014年～）と経過してきている。こ
の時期の社会経済背景の変遷の中に見る「ふる
さと意識」を「歌謡」の中に見てみる。

- ① 1965（昭和40）年「あゝ上野駅」（井沢八
郎 歌唱 関口義明 作詞 荒井英一 作
曲）「♪どこかに故郷の香りを乗せて 入る
列車の懐かしさ 上野はおいらの心の駅だ
くじけちゃならない人生は あの日 ここか
ら始まった」（傍線筆者）
- ② 1973（昭和48）年「ふるさと」（五木ひろ
し 歌唱 山口洋子 作詞 平尾昌晃 作
曲）「♪祭りも近いと 汽笛は呼ぶが 洗い
ざらしの ジーパン一つ 白い花咲く 故郷
が 日暮れりゃ 恋しくなるばかり」（傍線筆
者）
- ③ 1977（昭和52）年「北国の春」（千昌夫
歌唱 いではく 作詞 遠藤実 作曲）「♪
白樺青空南風 こぶし咲くあの丘 北国の
ああ 北国の春 季節が都会では わからな
いだろと 届いたおふくろの 小さな包み
あのふるさとへ帰ろうかな 帰ろうかな」（傍
線筆者）
- ④ 1977（昭和52）年「案山子」（さだまさし
歌唱 さだまさし 作詞・作曲）「♪元気で
いるか 町には慣れたか 友達できたか さ
みしくないか お金はあるか 今度何時かえ
る 城跡から見下ろせば 青く細い川 橋の
たもとに 造り酒屋の煉瓦煙突このまちを綿
菓子に染め抜いた雪が 消えれば お前がこ
こをでてから 初めての春 手紙が無理なら
電話でもいい 金頼むのひとことでもいい
お前の笑顔を 待ちわびる おふくろに 聞
かせてやってくれ」（傍線筆者）
- ⑤ 「ふるさと」をテーマとした最も新しい歌は、

2011（平成23）年「ふるさとは今もかわら
ず」（新沼謙治 歌唱 新沼謙治 作詞・作
曲）である。2011年3月11日に発生した東
北大震災で岩手県大船渡市出身であった新沼
謙治が「ふるさと」の復興を願って、作詞・
作曲し、自ら歌唱している曲である。今日の
人々の「ふるさと」に対する意識の原点と精
神的内面を端的に表現している。「ふるさと」
に対する思いは斯くあるべきであると訴えて
いるようで興味深いものがある。

歌詞は「♪爽やかな 朝靄の中を 静かに
流れる川 透き通る 風は身体をすり抜け
薫草の青さよ 緑豊かなふるさと 花も鳥
も歌うよ 君も僕もあなたもここで生まれ
た ああ ふるさとは 今もかわらず こ
の町であなたに出逢えて本当に よかった
ありがとう ふるさとの青空よ 友よ君に
逢いたい 緑豊かなふるさと 花も鳥も
歌うよ 君も僕もあなたも ここで育った
ああ ふるさとは 今もかわらず みんな
で 声をかけあって 力合わせて 生きて
きた 遠い山並みその姿 いつも静かに
みつめてる 緑豊かな ふるさと 花も鳥
も歌うよ 君も僕もあなたも ここで育っ
た ああ ふるさとは 今もかわらず ふ
るさと 未来へ続け・・・」（傍線筆
者）である。

正に高度経済成長期から現代まで社会状況を
背景にした「ふるさと意識」を表現した歌だ。
①は、地方からの労働力が大量に都市へ流入し
ていた時代、自己の努力によって希望が叶うこ
とを予感させる「集団就職の時代」を象徴する
歌である。「ふるさと」の家族へ決意を伝える
メッセージである。そこに絶望感や閉塞感は見
られない。②は、離れがたい「ふるさと」への
恋慕の心情を歌い上げているなかに、やがては
ふるさとに帰ることを夢見る意識心情が見える。
③は、「ふるさと」の家族との絆を想い、叶う
なら「ふるさと」へ帰りたい心情が歌い上げら
れていて胸を打つ。④は、都会へ出た息子を案

ずる母親の気持ちを押し量り父親からの「ふるさと」発のメッセージとして伝える。子を思う親の心情を巧みに表現した叙情詩である。⑤は、今日の「ふるさと」観を見事に表現しているのではないかと思う歌である。「ふるさと」は人間の生きる原点であることを歌い上げている。そして、「ふるさと」を起点として「ふるさと未来へ続け・・・」と歌うフレーズのなかに「ふるさと」は消滅させてはいけない大切な「場」であり、自立をしてゆく拠点とならなければならないと訴えかけているようにも思える。このように、この時期の「ふるさと意識」の中には、「ふるさと」に対する「望郷」「懐古」といった、自己の努力だけではどうにもならない「絶望感」は感じられない。むしろ未来への希望が歌われている。「ふるさと」への「愛着」「恋慕」の情念が「契り」「絆」「思いやり」という人間本来の関係性を色濃く表現されているのが特色である。そして、「ふるさと」への回帰、再生を願う心情を表現するものが多くなってきている。

以上のように、明治維新以降今日までの「ふるさと意識」の変遷を歌謡史の歌詞の中で概略を見た。変遷を図式的にまとめると、Sub culture (歌謡史)の中に見る「ふるさと意識」の存在形態は、大筋として望郷・懐古の念→「ふるさと」原点回帰→「ふるさと」再生へと経済社会の変化を背景に意識の変遷が読み取れないだろうか。正にSub cultureである「流行歌」のなかに「ふるさと」＝「地域」に対する視点と価値観が今日、明らかに「ふるさと再生」の意識形成へと一つの転換期を迎えていることが解る。正に「唄は世につれ、世は唄につれ」¹³⁾である。歌謡曲はその時代の世相を投影する文化であり、民衆の意識を如実に反映している。歌謡曲、演歌は民衆の「うた」であり民衆文化の一角を占めてきている。「その時代に一世を風靡した曲は多くの民衆に受け入れられた「はやり歌」であり、大衆文化として民衆の意識、心情を表現しているものである。その時代に

人々がどのような「ふるさと意識」を持っていたか、時代とともに口ずさまれた一つ一つの歌の中にそれは端的に反映されているものと思われる。「うた」の変遷は社会の「意識」を映す鏡でもある。豊かさ(富)に対する価値観も「物より心」へと質的に変化してきている。明らかな意識＝価値観の変化である。東北大震災(2011.3.11)以降ふるさと回帰と再生の意識はより強く意識されて来ている社会状況に留意したい。そして、震災を経て以降地域社会を中心とする「絆」を軸とした「心」を重視した多様な価値観がより一層社会の中で加速していることも看過できない。

このように、明治維新以降近代化とともに発展し続けてきた約150年の歴史の流れの中で所謂「ふるさと意識」は、社会の構造変化とともに変遷してきていることが読み取れる。それは、大まかに分けるとすれば、全体経済の成長、地域の衰退、環境破壊の歴史であったとも言えるものであった。特に環境破壊の歴史は地域の人々の「ふるさと意識」を強く刺激し「ふるさと」の「自然環境」「文化遺産」「歴史遺産」の保護、保全への意識高揚と環境優先の価値観への転換の動きとなって来ている。こうした「ふるさと意識」の醸成は「地域活性化」の源泉になっていくものであった。

Ⅲ. 市民活動「ふるさと春日井学」研究フォーラムの実践

－「ふるさと意識」醸成運動として－

市民活動「ふるさと春日井学」研究フォーラムの実践は「ふるさと意識」を醸成する実践である。地域を活性化させてゆく上において本質的な絶対条件であると思っている。「ふるさと意識なくして地域活性化なし」は「地域活性化」の基本的柱でなければならない。「ふるさと意識」を広範に醸成されて行けば、自ずとなすべき目的と目標が定まってくるはずであると考えからである。その考えに基づいて、2013年(平成25年)3月3日(日)「ふるさと春日井学」

研究フォーラムを立ち上げた。春日井市市民活動支援センター条例（地方自治法（昭和22年法律第67号）第244条の2）の規定に基づく市民活動団体として認定を受けて活動している。設立時の「趣意書」を以下に示す。

「ふるさと春日井学」研究フォーラム設立趣意
Forum for Furusato Kasugai Studies

「ふるさと学」とは、ある特定地域の文化、歴史、自然等に関する学習・研究を行うことです。それは、地域住民のアイデンティティー（Identity）の醸成、地域の特色、魅力等の再発見をすることであり、「地域づくり」の基本的条件となる学習と定義されているものです。

ふるさとの歴史や文化や環境等、幅広く居住する地域がどんなまちかということによって、ふるさとの良さを認識し、ふるさとに愛着を持つことができます。ふるさとへの愛着がふるさとの歴史や文化、環境を守るための活動につながり、そのことが未来に向かって、どんなまちづくりをしてゆくのかを考える契機となってゆきます。

わがまち春日井の歴史や文化や自然環境、産業等幅広くその特徴を学び、再発見、再評価をしてゆくことはわがまち春日井への愛着を生み、まちの歴史や文化を守っていくということにつながります。そして、まちの活性化にも繋がってゆくものと考えます。

ここに広く春日井市民の参加の場をつくるべく「ふるさと春日井学」研究フォーラムを設立し、多くの市民が「ふるさと」に関する歴史、文化、自然、産業等について学び、主体的に参加し「ふるさとまちづくり」の「研究」・「討論」・「交流」の「場」としてゆきたいと思えます。「ふるさとまちづくり」「ふるさと春日井学」に関心を持ち、学ぶ意識と意欲をもつ全ての老若男女、年齢、地位、学歴、思想、信条、門地を問わずご賛同していただける多くの方々が参加できる場にしてゆきたいと思っております。

平成25年3月3日

- 発起人代表 河地 清（名古屋学院大学大学院非常勤講師）
- 塚田忠雄（郷土春日井研究会会長）
- 近藤雅英（春日井古文書研究会会長）
- 野田淑人（春日井ビオトープの会長）

毎月第一日曜日を定例の「フォーラム」開催日としている。事前にどのようなテーマで、講師を誰に依頼するのかを役員会で話し合い決める。春日井市域の自然、歴史、文化、民族芸能、教育、福祉、コミュニティー等々総合領域分野から、専門的見識をもっている人物を選定する。「フォーラム」の主旨を説明し同意していただいた後講師依頼をする。

場所は、春日井市市民活動支援センター（ささえ愛センター）（春日井市春見町3番地）第一集会室（最大80名収容）で実施している。プロジェクター、他機材貸出しは無料である。毎回案内チラシを作成し各公民館、コミュニテ



〈図1〉
(写真)：中日新聞 2014.1.27 報道記事

〈表2〉「ふるさと春日井学」研究フォーラム実施一覧表

※平成29年1月8日現在. 講師肩書きは実施時期のもの. 敬称略で示す。

平成25年度	フォーラムテーマ	講師
3/3(日)	「ふるさと春日井学」と「まちづくり」について	河地 清 (「ふるさと春日井学」研究フォーラム会長)
	「書のまち春日井」と小野道風について	塚田 忠雄 (郷土春日井研究会会長)
4/7(日)	「下街道」の歴史	村中 治彦 (春日井郷土史研究会会長)
	「歴史ある街道」と鳥居松商店街の活性化	市原 和久 ((株)市原商店社長)
5/5(日)	内津川流域の歴史	長縄 道明 (元関田区長)
	春日井の自然	波多野 茂 (春日井自然友の会顧問)
6/2(日)	産業遺構の保存運動 - 中央線トンネルの保存 -	村上 真善 (旧国鉄トンネル保存・再生プロジェクト事務局長)
	中央線敷設と春日井の近代化	安田 裕次 (春日井市立味美中学校教諭)
7/7(日)	ふるさとと再生とまちづくり	大塚 俊幸 (中部大学人文学部准教授)
	勝川商店街の再生	水野 隆 (合資会社水徳 代表社員)
8/4(日)	地域活性化の方法と実践 - テーマ説明 -	河地 清 (名古屋学院大学大学院非常勤講師)
	地域活性化の取組 - 近江八幡市ふるさと学習の事例 -	安部 耕作 (近江八幡市職員・日本産業科学学会会員)
8/28 (金)	巡検バスツアー「小野道風の源流を訪ねる」	主催「ふるさと春日井学」研究フォーラム
9/1(日)	庄内川水系の自然	原 彰 (名城大学名誉教授)
	庄内川流域史 - 庄内川水運の歴史を中心に -	櫻井 芳昭 (春日井郷土史研究会会員)
10/13(日)	小野道風の記憶と伝承	松戸戸誌研究会 (代表 長谷川正巳)
	小野道風出生の真実	塚田 忠雄 (郷土春日井研究会会長)
11/3(日)	福澤諭吉と林 金兵衛	河地 清 (名古屋学院大学大学院非常勤講師)
	ふるさと春日井の危機を救った人々	近藤 雅英 (春日井古文書研究会会長)
12/1(日)	ふるさと春日井高蔵寺地区の今昔	金子 力 (春日井の戦争を記録する会会員)
	高蔵寺商店街の再生を考え	青山 博徳 (春日井市商店連合会副会長)
1/5(日)	ふるさと春日井のまちづくりと商業の活性化政策	塚田 忠雄 (郷土春日井研究会会長)
2/2(日)	書道文化の振興と地域の活性化 - 小野道風顕彰活動の歴史 -	安達 柏亭 (愛知教育大学非常勤講師・書家)
	「まちづくり」の新しい発想	河地 清 (名古屋学院大学大学院非常勤講師)
平成26年度		
3/30(日)	「書のまち」春日井を築いた人々	中村 立強 (春日井市美術協会会長)
4/5 (土)	特別企画講演：「今日のまちづくりの発想 - 情報社会のまちづくり - 百年単位の目標転換 -」	月尾 嘉男 (東京大学名誉教授)
		村中 治彦 (春日井市文化財保護審議委員)
5/4(日)	春日井市立郷土館と鳥居松の歴史	近藤 雅英 (春日井古文書研究会会長)
	鳥居松の歴史	金子 力 (春日井の戦争を記録する会会員)
6/1(日)	春日井の戦争遺構 - 陸軍鷹来工廠を中心に -	小川 茂徳 (日本淡水魚生態研究所所長)
7/6(日)	春日井の自然「流域の淡水魚」	野田 淑人 (春日井ビオトープの会会長)
	春日井のビオトープ「ほたるの飼育」報告	近藤 雅英 (春日井古文書研究会会長)
8/3(日)	ふるさと春日井・震災の歴史 - 濃尾大震災と地域の人々 -	近藤 雅英 (春日井古文書研究会会長)
9/7(日)	「ふるさと春日井と俳人横井也有」	川口 一彦 (愛知福音キリスト教会・牧師・書家)
	「也有句碑」拓本体験	高橋 勇夫 (みどりのまちづくりグループ代表)
10/5(日)	ふるさと春日井の自然 - みどりのまちづくり実践報告 -	河地 清 (名古屋学院大学大学院非常勤講師)
11/2(日)	石碑に刻まれたふるさとの歴史 - 林 金兵衛石碑を中心に -	宮田 健一 (春日井市立小野小学校校長)
12/7(日)	「書のまち春日井」の書写教育 - 現状と課題 -	櫻井 芳昭 (春日井市文化財保護審議委員)
1/11(日)	「御嶽講と覚明霊神」	塚田 忠雄 (郷土春日井研究会会長)
2/1(日)	「小野道風生誕説の検証」	
平成27年度		
3/1(日)	ふるさと春日井古代土地制度 - 一条里制の検討・安食荘を中心に -	高橋 敏明 (愛知県文化財保護指導委員)
4/5(日)	「書のまち春日井と空海」 - 景教碑を中心に -	川口 一彦 (愛知福音キリスト教会・牧師)
5/3(日)	ふるさと創生を考える - 歴史・文化を生かしたまちづくり -	河地 清 (名古屋学院大学大学院非常勤講師)
	ふるさと春日井玉野地区の今昔	近藤 雅英 (春日井古文書研究会会長)
6/7(日)	ふるさと春日井の特色ある文化 - 「書の魅力について」Ⅰ	落合 哲 (春日井市道風記念館館長)
7/5(日)	ふるさと春日井の特色ある文化 - 「書の魅力について」Ⅱ	原田 凍谷 (中部大学講師・書家)
8/2(日)	ふるさと春日井の特色ある文化 - 「書の魅力について」Ⅲ	安達 柏亭 (愛知教育大講師・書家)
9/6(日)	ふるさと春日井の自然 - ホタルのロマン -	野田 淑人 (春日井ビオトープの会会長)
	「高貝用水」探訪	塚田 忠雄 (郷土春日井研究会会長)
9/27(日)	巡検バスツアー「小野道風終焉の地を訪ねる」	主催「ふるさと春日井学」研究フォーラム
10/11(日)	『ふるさと春日井の魅力』てなに？	宮本 忠雄 (タレント・春日井市広報大使)
11/1(日)	『ふるさと春日井』の地質 - 防災の基礎知識① -	長縄 秀孝 (春日井自然友の会会員)
12/6(日)	『濃尾地震と落合池』 - 防災の基礎知識② -	近藤 雅英 (春日井古文書研究会会長)
1/10(日)	『ふるさと春日井』の防災を考える - 防災の基礎知識③ -	加藤喜一郎 (元春日井消防署職員)
2/14(日)	「ものづくり」の視点から地域活性化への提言	梶田 正勝 (経営コンサルタント)
平成28年度		
3/6(日)	「地域活性化の本質的課題」 - 日本産業科学学会「学会」報告 -	河地 清 (名古屋学院大学大学院非常勤講師)
4/3(日)	今後の商店街と地域活性化の課題 - 各地の事例を中心として -	岡田 千尋 (名古屋学院大学商学部教授)
5/1(日)	地域活性化と「町内会」の役割	中田 實 (東海自治体問題研究所副理事長)
6/5(日)	町に眠る詩 - アートを活かした「まちづくり」	村田 仁 (詩人・現代美術家)
7/3(日)	町内会で地域活性化 - 「六軒屋町内連合会の実践報告」 -	前田 幸一 (六軒屋地区社会福祉協議会会長)
8/7(日)	コミュニティービジネスで「地域活性化」 - 待機児童問題と取り組む社会起業家の実践報告 -	京 邦治 (NPO 法人くんぱるのハウス理事長)
9/4(日)	ふるさと春日井の大木・名木 - 春日井市緑化に関する条例と保存樹の実態 -	波多野 茂 (春日井自然友の会顧問)
10/2(日)	文化施設を活用した「地域活性化」 - 滋賀県長浜市の事例を中心に -	鳥羽 都子 (前財団法人かすがい市民文化財団チーフマネージャー)
11/6(日)	棒の手の歴史と保存活動 - 源氏天流棒の手を中心に -	堀尾 久人 (春日井郷土史研究会会員)
12/4(日)	サボテンの町春日井の源流 - 実生サボテン日本一への苦闘 -	伊藤安季子 (伊藤サボテン園代表)
1/8(日)	ふるさと春日井の明治10年代における「地域再生」 - 春日井郡の自力更生運動を中心に -	河地 清 (修文大学非常勤講師)

ィーセンター等へ配置してもらおう。メディア関係では、**〈図1〉**に示すように中日新聞社春日井支局に依頼して、近郊版「催し物欄」に紙上掲載、地元ケーブルTV、商店街ニュース等にも取材、掲載依頼をしている。

参加人員は、テーマ、天候、諸行事（イベント、祭り等）とのバッティングその他の諸条件も重なったりするが、テーマによって70~30人が参加している。2013年（平成25年）3月3日（日）~2017年（平成29年）1月8日（日）48回までの延べ参加人数は約1,550人である。「フォーラム」の主旨に沿ってただ単に講演を聴くだけではなく講演後必ず質疑応答を実施している。テーマ毎に「地域活性化」にどのように活用するか、「ふるさと」の魅力資源をどのように活かすかが討議されている。

どのような「フォーラム」テーマを設定したか、そして、どのような講師に依頼したかを、**〈表2〉「ふるさと春日井学」研究フォーラム実施一覧表**として示す。

「ふるさと春日井学」研究フォーラムの内容は、かすがい市民活動情報サイト：<http://kasugai.genki365.net/>で公開され発信している。その他地域の情報網を通じて随時発信している。毎回『会報』を発行（6頁カラー冊子）、現在1号~48号（2017.1.25現在）までの発行となっている。春日井地域の特色、魅力となる事柄を配布し情報発信している。このような実践を通じてどのような、知見と課題が出てきたかをまとめてみた。

①「ふるさと意識」の醸成という観点から、春日井市域の自然・文化・歴史を中心に総合的に発信している。講師は、原則市民の中から各分野の研究を永年続けておられる通称「まちなか研究者」「下町研究者」（傍点筆者）と言われる最も地域生活者に身近な方々ばかりである。郷土史家、自然愛好家、NPO事業者、書家、地域教育者、防災研究家等々、全くの市井の人々ばかりである。「ふるさと」を愛し、誇りをもって、永年地域の研究を継続さ

れ、その魅力を個別の研究成果として発信されておられるこうした人々の発表は、貴重な「ふるさと意識」醸成の証言資料（傍線筆者）となるものである。所謂行政が行っている「生涯学習」に対して「ふるさと春日井学」研究フォーラムは、民間の生涯学習研究の発表の場として、「フォーラム」によって情報発信することによって、確実に地域の魅力、特色を「ふるさと意識」として醸成し涵養する役割を果たし、さらに所謂「まちづくり」の応援メッセージとして促進的役割も担っている。

②多様で広範な人脈の中で分野の異なる多くの人達との出会いを得ることが出来ている。そして、新たな「ふるさと意識」に基づく「地域活性化」の動きも見られるようになった。講師を依頼する作業は、優れて、「ふるさと春日井学」研究フォーラムの主旨を理解して頂くことに努めることであり、「ふるさと意識」に基づいて置かれた地位、立場でリーダーシップを発揮していただくことに繋げることを目的とするものでもある。各種組織のリーダー、行政の役職者、市議員等々との出会いが次の新たな出会いを創り出しながら実践の範囲は広がっていつている。「ふるさと意識」をもった多くの人材に出会えることによって、「ふるさと意識」を基盤にした新たな実践の動きが生まれ地域に新たな「地域活性化」の活動が始まったこともある。一つ一つの情報発信は確実に「ふるさと意識」の伝播の波を広げていつていることが知見できた。

IV. 「ふるさと春日井学」研究フォーラムの検証と分析

—「地域活性化」への新たな動きと知見—

地域の魅力や特色が広範に「ふるさと意識」として伝播され、醸成されることによって、地域の人々の意識の中に広範に親しみと愛着と誇りが生まれてくるそうした状況や現象は様々な形であらわれてきたことを「ふるさと春日井

学」研究フォーラムの実践の中で知見することが出来た。以下知見出来た五つの事例を取り上げて紹介する。

①「春日井市」²⁴⁾の文化の特色として「書道文化」を挙げることができる。高層12階の市庁舎に掲げられた「書のまち春日井」(『春日井市道風記念館』(春日井市松河戸町 946-2 電話:0568-82-6110)は、春日井が生んだ三蹟の一人小野道風の生誕地伝説があることから、その偉業を永く後世に伝えるため1981年(昭和56年)11月に開館した。道風研究資料を各種展示する。書に関する企画展が常時開かれている。「書のまち春日井」の情報発信拠点の中心となっている。)の大看板がそれを示している。「ふるさと春日井学」研究フォーラムでは、「書のまち春日井」と小野道風について/巡検バスツアー「小野道風の源流を訪ねる」/「小野道風-歴史の記憶と伝承」/小野道風出生の真実/「書のまち」春日井を築いた人々/ふるさと春日井の特色ある文化-「書の魅力について」I/II/III/巡検バスツアー「小野道風終焉の地を訪ねる」等のフォーラムを開催し発信してきた。小野道風研究、書の魅力については、郷土史家、書家、地域の「松河戸誌研究会」²⁵⁾の講師の方々によって発信された。特に「松河戸誌研究会」による発表は、先祖代々地域に伝えられてきた「記憶」と「伝承」を地道に真摯に引き継がれ、資料の蒐集、遺跡の保存活動を続けてこられて今日の、「道風記念館」、遺跡保存会の基礎を作ってこられたものであることが理解できるものであった。そして、それは地域の人々が先祖から引き継いできた「記憶」と「伝承」の活動を幾世代にもわたって続けられてきていることによって、「小野道風」という人物が三蹟として日本の文化史に名を残した地域の「誇り」と「Identity」を生み出した原点になっていることを伝えるものであり、894年に生誕した小野道風について、1120有余年の時間軸は、「記憶」と「伝承」を紡ぎながら私たちに歴史資産、文化資産を継承してきたことを伝えるもので

あった。「松河戸誌研究会」で蓄積されてきた社会的記憶、伝承(口承伝統、文書、イメージ、史跡保存、文化的行事等々)の記録の中から、道風に関する個別の歴史研究や書道文化活動の成果は生まれ、今日あると言うことができる。

歴史研究は、地域の人々にしか感じ得ない発想や閃を第一義に考えて行くことが重要であると考える。その意味から、地域の人達の「記憶」「伝承」の記録の営みは、小野道風研究にとって最も重視されなければならないことである。歴史を語るということは、過去から伝えられてきた「記憶」「伝承」をその時々々の社会情勢、価値観、歴史意識、文化受容度等々によって記録され、叙述されて未来へ伝えられてゆくという行為であることを考えたとき「松河戸誌研究会」の果たしている役割は大きいと言える。

このことが、「ふるさと春日井学」研究フォーラムの会員でもある一市議会議員の一般質問<資料1>として具現化されたことは、一つの「活性化」への意識の変化と見ることができる。市民の代表である市会議員の「ふるさと意識」を背景にした質問は、行政としても無視はできない。この知見は、地域の特色ある文化、芸術資源を活用した「地域活性化」の具体的提案であり、地域のリーダーの「ふるさと意識」の変化が行動に表れた典型的な事例である。

以上のことを踏まえて「研究フォーラム」では、「書のまち春日井」のスローガンで「地域活性化」を図るための幾つかの提案が出されたので紹介しておく。

- ・「道風記念館」は、「書作品の収蔵・展示・公開を通じて市民の芸術文化の振興に資する」ことだけではなく、同時に特色ある「まちづくり」の拠点として「活性化」への役割を果たす文化施設として活用されてゆくことが期待される。
- ・「書のまち」に相応しい景観づくりをす

(資料1) 市議会一般質問内容

山田哲也春日井市議会議員（本会会員）による一般質問（平成27年12月春日井市第五回市議会定例会）質問内容は「『書のまち春日井』ブランドの推進について問う」である。

【一回目 Q】議長のお許しをいただきましたので、通告に従い、「書のまち春日井」ブランドの推進について質問をさせていただきます。春日井市は、平安時代の三跡の一人、小野道風が生まれたということで「書のまち春日井」を呼称し、キャッチフレーズとして書道文化の振興に力を入れています。私も小学生時代には毎年、県下児童・生徒席上揮毫大会に参加した思い出もあり、「書のまち春日井」への思い入れはひとかたならぬものがあります。この揮毫大会の歴史を確認したところ、1936年より小野道風公ゆかりの地として、書道教育の進展を願ひ始まり、今年で80回目、80年の歴史があるとのこと。空襲警報の中でも伊勢湾台風の年でも現在まで絶えることなく続いている書の活動です。太平洋戦争中は、存続を危ぶむ声もありましたが、一度絶えたら無くなってしまおうとの思いで、引率などの職員は必死の覚悟で戦中も開催を続けたそうです。また、1949年から続く全国規模の書の公募展「道風展」も毎年開催されています。このように小野道風の遺徳と書の伝統は、教育関係者や地域の人々の情熱と努力で守られてきたものです。また、現在では書写教育は市内の多くの小学校でも行われていると伺っており、小野道風にゆかりの書の風景は教育現場で脈々と引き継がれ、春日井市民の書への愛着も深いものが感じられます。今回の取り上げたテーマである「書のまち春日井」ブランドの推進については、言い換えるなら、春日井にある文化歴史資産を現代の資産とし、その活用によって地域を活性化して行くというものであります。当市のかすがい市民文化振興プラン（改訂版）を見ますと、施策として「文化の力でまちを元気にする」という内容がありますが、この中で「書を始めとする様々な文化資源を活用し、観光や産業の分野との連携を図ります。」や、同じく文化資源を生かし地域経済と文化活動の活性化を図るという記載があります。ここでは商工会議所、中部大学、商店街と市や財団との連携の強化も記載されています。私は本市としても、春日井を活性化する方法として、各分野の方々と連携し、どんどん「書のまち春日井」ブランドの推進を行い、まちづくりを進めるべきだと感じています。そこで一つ目の質問をさせていただきます。「書のまち春日井」ブランドの推進について、本市の現状の取り組みについてご説明いただきたいと存じます。以上で壇上からの質問を終わります。

【二回目 Q】現状のご説明、ありがとうございます。継続的に、また、新たに様々な取り組みをされていることが確認できました。それでは2回目の質問に入ります。春日井市民文化振興プランの中にはマスコットキャラクターの活用の記載があり、その中からマスコットキャラクターの道風君が生まれたのだと認識しています。あちこちのイベントに道風君が参加している姿を拝見して、イベントの盛り上げに貢献していると思いますが、その他、この道風君の活用事例がありましたら、ご紹介願います。

【三回目 Q】ありがとうございます。今ご説明いただいたのは、まさしくこれからの時代を担う「書のまち春日井」ブランドの推進による春日井の活性化につながる施策の一つだと思います。これからも現在行われている活動は今後もブラッシュアップして進めていただければと思います。それでは3回目に入ります。ここで、私からは長野県佐久市望月町で行われている書を用いたまち興し施策や今後の春日井市の「書のまち春日井」ブランドの推進による春日井の活性化策の一例をご紹介します。今後の参考事例にいただければと思います。春日井は小野道風という歴史的存在をもつ環境と全市的に書道文化の盛んな土地柄で「書のまち春日井」を掲げていますが、佐久市望月町は、現代書道の父と言われた比田井天来という著名な書家という歴史的存在をもって「書の里」としての環境作りを行っています。この地では、「天来自然公園」が造られています。天来生家の裏山に、天来とその門流たちの書を刻んだ石碑9本が建立されています。今後もこの石碑は増やされて行く予定だと聞いています。望月商店街には、天来の流れをくむ現代に活躍する書家が揮毫した看板80枚余がお店ごとに飾られ、観光客でにぎわいを見せています。また、日本で最初の書道博物館「天来記念館」も、毎年企画展を開催しています。このように対比して見てみると、春日井と佐久市望月町は、書を通じてのコンセプトが同じ町です。下街道と中仙道もそれぞれ近くにあり、歴史的遺産も似通った土地柄です。佐久市望月町の「書の里」が賑わいを見せているのは、産業・行政・民間協働の取り組み、知恵を出し合う努力、そして各流派を超えた書家の人たちの「まちづくり」を意識した協力があって、まちづくりに成功している例だと思います。春日井市も「書のまち春日井」ブランドを進めたまちづくりを行うには、佐久市望月町のやり方が一つの参考になるかと思っています。続いて、「書のまち春日井」ブランドを進めた活性化策ですが、現在、春日井の表玄関であるJR春日井駅前等には「書のまち春日井」をイメージするものがありません。ロータリーには小野道風関連のモニュメントを設置したり、駅構内の通路に春日井市内の書道家の揮毫したものや学生たちの作品を常時展示するのはいかがでしょうか。交通の表玄関から書の香りが漂うまちにするのも必要なことだと思います。また、ご存知の方も多いかと思いますが、鳥居松商店街振興組合さんは「街角メッセージ」をテーマとして、全街路灯の支柱に子供と大人の書道作品を思い思いのメッセージにして掲示して市民に鑑賞してもらおうとする取り組みを既に行っています。文化の特色を意識した取組みで、今後の広がり期待するところであります。私からの提案としては、市内の一角に「書のまち春日井」推進地区を設置し、書の香りがする取り組みを行ってはいかがでしょうか。街路灯の支柱には心とませる書道作品の展示が、店を見れば書家の揮毫した芸術的看板がある風景は魅力あるまちづくりに繋がるものと確信します。さらにこの地区には、現在春日井に無い書道関係の道具、材料（筆、硯、墨、書道用和紙、額）の専門店の設置や書の関連グッズ、土産品等々書道愛好者の全てのニーズを満たすものを置くのも最低限不可欠かと思っています。まちなみ全体が書の学びの場となっていることが重要で、書の専門的知識から趣味的知識に至るまで、書に関する全てが学べる、こういったまちなみを作っていたらと願います。最終的には「書のまち春日井」のガイドパンフレット及びマップを作成し国内外の観光客を「書のまち春日井」推進地区に呼び込んだり、書のモニュメントが等間隔に設置された道風記念館までの書文化の世界へ誘う散策路を整備し、こちらまで足を運んでいただけるよう持つていく。こうした形が最終完成形になるのではないのでしょうか。道風記念館近くには、「十五の森」の遺跡、鳥居松本通商店街は歴史ある「下街道」があります。書文化とこう言った歴史的遺構と合わせ、まちづくりを進めるのもより効果の出るものと期待します。「書のまち春日井」のスローガンは、もはや立派な市民のアイデンティティーであると言っても過言ではありません。「書のまち春日井」ブランドの推進は、必ずや春日井市の活力アップに繋がるものです。今後の取り組みをお願い申し上げます。私からの質問を終わります。（山田哲也氏は2016.2.6急逝されました。）

「ふるさと春日井学」研究フォーラム『会報6』（2013.8.13）『会報37』所収 <http://kasugai.genki365.net/>

るべきである。

- ・広く市民を巻き込んだ「書のイベント」を今以上に企画するべきである。
- ・グローバルな視野で春日井市域と書のイメージが発信されてゆくべきである。

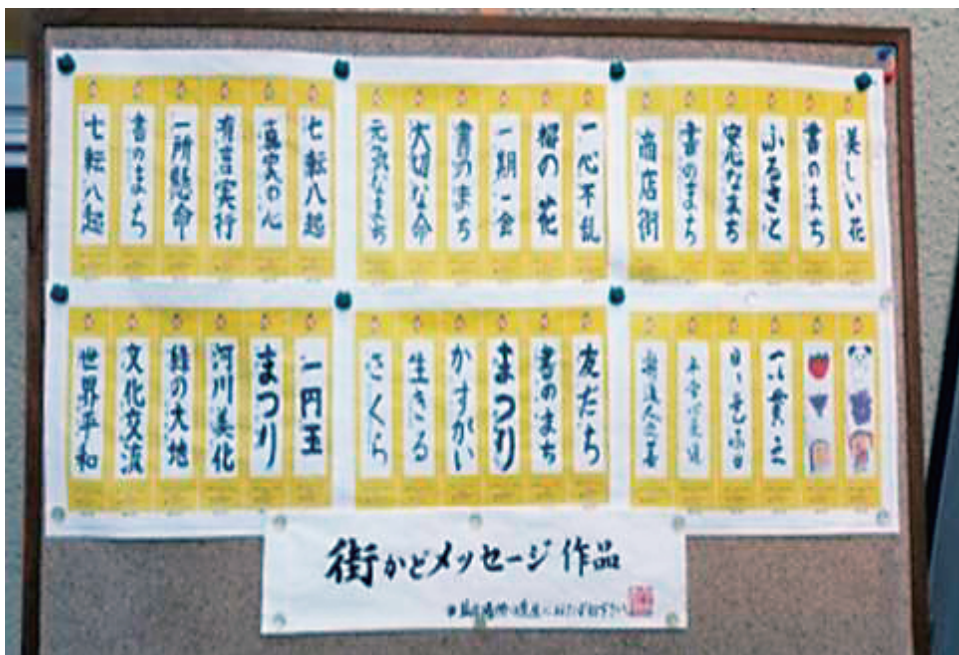
こうした取り組みが官民の協働で「ふるさと意識」に基づいた発想の中で「知恵」を出し合い具現化して行くことが期待される。

- ②高層 12 階の威風堂々の市庁舎を取り巻く鳥居松地域は古来より歴史ある地域発展の中核地区であった。しかし、現状は、三つの商店街（鳥居松本町通り商店街、広小路商店街、鳥居松商店街振興組合の三商店組合）は文字通りの「シャッター」商店街である。そんな中で意識ある商店主達の「地域活性化」への悪戦苦闘と試行錯誤は続いている。そうした中で「ふるさと春日井学」研究フォーラムの会員である商店主（商店街理事）の発想提案により「書のまち春日井」をアピールするための取り組みが展開されることになった。商店街に立ち並ぶ約 95 本の街灯に、地域の子供達の書いた書作品を「街角メッセージ」（春日井市鳥居松商店街振興組合による地域活性化事業の実践である。校区（市立八幡

小学校）他書塾、幼稚園の協力を得て子供達の作品を提供してもらっている。）〈図 2〉に示すように貼って展示しようというものだ。地域の小学校の 6 年生には卒業記念として書いてもらうよう学校側の協力を得、地域にある書塾の先生方の協力で「書のまち」「サボテン」「明るいまち」「道風」「夢の実現」等々自由な題で書いてもらい、ビニール加工の素材にカラー印刷したものを貼って観てもらおうというものだ。祖父母、父母、兄弟、友達、地域の関係者にこぞって見に来てもらおうという狙いだ。閑散としている商店街への地域文化を活用した、経済効果、流動人口の流入策として効果を出している。地域の文化を「ふるさと意識」の特色を活かした理に叶った創造的な「地域活性化」の取り組みの事例である。

こうした地域に芽生えた「ふるさと意識」を行政・商工会議所、地域住民が協働して「知恵」を出して行けば、創造的「まちづくり」が期待できるのではないかと確信する。

- ③春日井市は第二次世界大戦終結まで軍需産業を中核とする「軍都」（昭和 14 年 8 月名古屋陸軍工廠鳥居松製造所、昭和 16 年 12 月鷹来製造所開設。昭和 18



〈図 2〉

（写真）：商店街の「地域活性化」の取り組み

年6月1日春日井市制施行。)として発展した歴史をもっている。名古屋陸軍造幣廠と言われる従業員1万人規模の巨大な工場が鳥居松、鷹来地区にあった。各種銃火器、弾薬を中心に終戦直前には「風船爆弾」²⁶⁾(アメリカ本土爆撃のために開発された爆弾搭載の無人気球。361個がアメリカに落下が確認されている。)と言われる新兵器を、多くの若き女子挺身隊員(女子学生)等を動員して昼夜兼行で製造していた場所である。そして、米軍による「原爆模擬爆弾(パンブキン)」²⁷⁾(原爆模擬爆弾の名称「パンブキン」原爆投下実験として1945.8.14 4発投下された。)の投下によって壊滅した戦争遺構でもある。当時の「本部司令塔」のみが残り現在は、名城大学農学部附属農場事務棟として教育研究の場として活用されている。学校法人名城大学の所有物となっている。「軍都」春日井の歴史の証として「戦争遺構」遺産として語り継いでゆくべき重要な歴史的建造物であることを第15回「ふるさと春日井学」研究フォーラム「春日井の戦争遺構」(2014.6.1)で発信した。歴史的戦争遺構として保存すべきであるとの意見がフォーラムの中で出た。

しかし、その時点ではすでに名城大学理事会は経営方針として「旧本部司令塔」は取り壊し、新研究棟を建設することが決議されていたのである。偶然「ふるさと春日井学」研究フォーラムの会員であり、本会理事の一人が名城大学校友会役員であったという出会いもあり、人脈を辿って「フォーラム」で発表された「研究資料」全てを理事長、学長に渡し、再検討の要請をすることとなった。大学内でも保存の意見があり、「名城大学附属農場の歴史的遺構保存をよびかける会」(学校法人名城大学理事長、学長中根敏晴様「名城大学附属農場の歴史的遺構を保存し、その意味を後世に伝えて下さい。」との内容で「呼びかけ人」27名の連盟で要望書を提出(2014.12.15))が発足することとなった。呼びかけ人代表として「ふるさと春日井学」研究フォーラム会長 河地 清に要請があり引き受けること

になった。2014年12月15日現在49名の賛同者が名を連ねることになった。賛同者の経歴は種々まちまちで、思想、信条、党派を越えた「ふるさと意識」のみが共通項の市民の集まりになっている。現在(2016.9現在)新研究棟は計画どおり建設されたが、「旧本部司令塔」は取り壊されてはいない。学園経営者の見識「歴史保存」「ふるさと意識」に基づく「意思決定」があったことは否定できないと思っている。「地域活性化」は歴史、文化をいかに活用し、行われなければならないかを考えさせられる典型的事例である。この「戦争遺構」は、ただ単に一組織の私有物ではなく、春日井市民全体の歴史資産であり共有物の性格をもつ遺産であることを考えた時、行政(文化財課)との協働の中で保存・継承をしてゆくことを期待したい。

④「地域活性化」の為には、その地域にある「歴史、文化、自然」を基盤にした「ふるさと意識」をどのように資源として活用し、経済効果を上げて地域経済に寄与して行くかという価値観に基づく発想に関心が高まり「地域政策」「まちづくり」の施策策定や具体的戦略の方策に取り込まなければならない。行政側の意識にも変化が垣間見られる事例を挙げる。

春日井市第五次総合計画(平成20年-29年の10年間、H25.3改定でH25-29)の5年間から春日井市の「まちづくり」についてのいくつかの行政側の意識の変化を知見することができた。春日井市産業振興アクションプラン(H21-25年度)の5年間『『ベッドタウン』から『ライフタウン』への推進エンジン』と題して、第五次春日井市総合計画の目標を掲げた「にぎわいと活力に満ち、未来に輝くまち」を実現するための実行計画で、平成21年(2009年)から平成25年(2013年)の5年間のプランである。しかしこの計画は、社会経済環境と社会の趨勢にはマッチしない展望困難な計画答申案であったことは否めないものであることを「ふるさと春日井学」研究フォー

ラムで指摘し発信した²⁸⁾。その後、平成 25 年改訂版 (26 年 3 月改訂)²⁹⁾は、平成 26 年度～30 年度 5 年間を実行計画とするもので、コンセプトは、改訂前のものと基本的にはかわっていないが、施策的に意識の変化が見られたと思われる箇所が 3 項目ほどあったので挙げておきたい。

1. 観光について「本市の特色である書道、サボテン、剣道等を対象とした他市にはない個性的な観光開発が期待されます。」³⁰⁾施策として「地域資源活用による地域ブランド化支援」を基本に「話題づくりの段階から、マーケット規模を踏まえた継続的に実施可能な体制づくりを進める」「春日井商工会議所が実施する民間の発想による観光の産業化を支援する。」³¹⁾

2. 商店街の活性化について「地区および地区住民と商店街の結びつきを強化するためのまちづくり活動支援」(28.4%)を基に商店街の活性化を進めるにあたっては、まちづくりの視点から広く施策を捉え、商店街がコミュニティーの交流・活動の場となるような支援の充実をはかることが課題と考えられます。」³²⁾施策として、「個性的な魅力を有する個店の育成が必要不可欠」とし、「商店街・地域との関係を意識して活動できるまちの担い手の育成を支援」する。そのためには、「コミュニティー形成のまちづくり推進機能の発揮を図っていくために」「商店街等の活性化については、商業者の取組みだけでなく、区や町内会、まちづくり団体やボランティア組織等の幅広い団体の協力が不可欠となっており、空き店舗対策においても、これらの入居をより広範に支援することがもとめられています。このため、商店街空き店舗活用事業について、入居資格をより広範なものとし、地域にひらかれた商店街としていきます。」³³⁾

3. 地域活性化について「個性あふれる地域に人が集まり、市民が誇ることでできる春日井」地域に根ざし、地域固有のニーズへの対応に積極的に取組もうとするやる気のある地域商業団体等が住民のアイデンティティーと直結す

るまちの顔や核として活躍するには・・・

「魅力ある個店の誘致や空き店舗の解消等による地域商業活性化に加え、これからの地域商業の核となるであろう次世代の商業者が、地域や商業団体、商店街のマネジメントの視点をもった地域商業づくりの担い手となるようその養成を支援することによって地域商業活性化を促進し、さらなるにぎわいの創出を支援する」「本市においても平成 31 年ころから人口減少が推測される中、地域経済規模の縮小を補うため、サボテンを始めとした地域資源活用による地域ブランド化を支援するとともに、市内への流入人口の増加を目指し、活力ある春日井市を築く」³⁴⁾としている。

こうした意識の変化は、社会経済環境の変化と、今後の社会生活環境の想定される変化に対応してゆかなければならない中での発想の転換を現したものと言えるが、所謂「ふるさと意識」がさらに色濃く具現化されたものとは言い難い面もあるが、明らかに意識の変化が見られる評価すべき計画策定となっている。平成 20 年第五次春日井市総合計画 (新長期ビジョン 2008~2017) では、特に市民や市外からの人に「誇れる歴史と文化」はない(傍線筆者)と結論し、「観光活用による賑わいを市は事実上あきらめた。」(傍線筆者)としていた当初の意識が「民間の発想による観光の産業化を支援する」(傍線筆者)に発想を転換している。「ふるさと意識」を意識した発想の転換と見ることが知見出来た。

⑤第 4 回「ふるさと春日井学」研究フォーラムで「ふるさと春日井の産業遺構保存－「中央線敷設の歴史と遺構保存の現状を学ぶ」－(『会報』2013.6.10 発行)を発信した。愛岐トンネル群は春日井市、多治見市、愛知・岐阜の県境を挟んで存在する、日本の近代化を象徴する大切な歴史産業遺構である。この歴史遺産を観光化し経済効果を出しながら「地域活性化」を図る発想が、平成 25 年時点では、行政側に当初からあったわけではなかった。中央線敷設の歴史と、遺構保存活動

の経過は、NPO 法人愛岐トンネル群保存再生委員会の村上真善氏（村上真善 勝川周辺まちづくり協議会委員・特別部会長，春日井町文化向上委員会代表世話人，旧国鉄トンネル保存・再生プロジェクト事務局長）の言によれば「109名の会員で、5年間で10万人を見学会に参加させ、これまで経産省、国土交通省から各賞を受賞。昨年は国交省のふるさと手作り賞，緑の都市賞を受賞するという実績をもつ。この遺産を市に寄付をしようと申し出たとき市長は面会拒否？とか。当時市役所には観光課がない。この部門は商工会議所に下駄を預けたとか。地域の光を多くの人に伝えたい，誇りを持てるようにしたいと、「ヨソモノ」が頑張ってきた。これからも未来に向かってロマンを語っていきたい」と熱弁された。パワフルであった。ナショナルトラスト運動での保存に取り組んでいる。また、「フットパスイメージ図」のように定光寺⇒古虎溪間通り抜け，面への広がりにも挑むと宣言。こうした、「ふるさと意識」に根ざした，信念の活動は，今日ようやく理解されてきたということが出来る。行政側の意識の変化，「ふるさと意識」からくる地域資源活用による価値創造の「地域活性化」の事例である。³⁵⁾

「まちづくり」三原則として「よその」「わかもの」「ばかもの」を説く見解もある。この事例は，所謂「よその」による「地域活性化」の事例である。「ふるさと意識」のある地域住民が気にも留めていなかった歴史的遺産に光を当て悪戦苦闘の中で後世へ繋ぐ活動が行われたことに，行政も含め地域住民は敬意を払わねばならない事例であると考え。本来は，地域住民の中にある「ふるさと意識」を核として実践されなければならない事例である。足元の風景，歴史，文化を日常の空気のように感じて生活する地域住民の中に「ふるさと意識」醸成の環境を創って行くことの重要性を指摘する実践事例である。「地域活性化」は、「よその」ではなく本来は，「地域住民」が行うべきものである

ということを教えてくれている事例である。

補論 創造的「まちづくり」論について —文化施設を活かした「地域活性化」を中心に—

明治維新から今日までの資本主義経済の発展と「ふるさと意識」の変遷を史的に概観してみたときに，それは，「ふるさと意識」崩壊の歴史でもあることが解る。環境破壊との闘いであり，地域意識への覚醒と自覚の歴史でもあった。「まちづくり」とは，「地域の資源を磨き，価値を創造すること」³⁶⁾と自覚されるようになった今日，サブカルチャーにも表現されるように「ふるさと意識」再生の時代へと時代の潮流は大きく変わりつつある。価値転換の時代である。視点を変えた発想が求められる時代である。市場で評価される価値だけではなく，市場経済では，利用価値のないものとして長い時間埋もれ経済効果を生まないものとして注目されてこなかった，それぞれの地域に必ず存在する歴史，文化，自然を見直そうという意識とそこに，生活の価値観を見出して行こうとする意識の変化が今日状況ではないかと思う。視点の転換は，新しい価値観としてGNP (gross national product) からGRC (gross region cool) へと発想の転換を図ることが求められている。「ふるさと意識」とは，そうした価値観をも包摂した価値観である。「まちづくり」という視点で見たとき，中央中心主導の画一化された「まちづくり」から地域の個性，特色を活かした地域主導の「まちづくり」へと視点を変えることが求められている。その意味で言えば，「中央」に対する「地方」という意識に依拠する視点ではなく地方の主体的な「ふるさと創生」であるべきである。今日政府が政策として実施している「地方創生事業」で言うところの「地方」という意識の中には，まだまだ「官主導」の「まちづくり」という発想の意識が拭い去れない。その意味で，地域主体＝「ふるさと意識」による「まちづくり」へのインパクトは弱いのではないかと感ずる。

今後の方向性を示す「ふるさと意識」に視座を置いた「まちづくり」論の研究は、川勝平太氏、月尾嘉男氏等が新しい価値論として提唱されてきている。従来の発想にはない、新しい「まちづくり」論の研究成果を挙げ、今後の創造的「まちづくり」論の参考にしたい。

①安部耕作氏の「まちづくり」論

市民の「ふるさと意識」を行政の仕組み作りの過程の中で協働し「地域活性化」させた実践から「まちづくり」論を述べている。詳細は、本論文「I. 「地域活性化」と「まちづくり」の方法試論」の中で述べているので割愛する。

②足立基浩氏の「まちづくり」論³⁷⁾

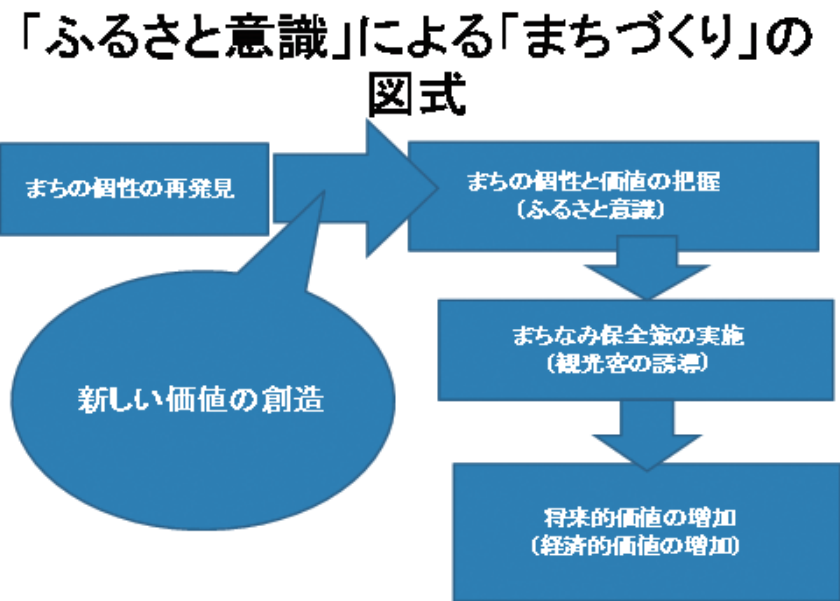
新しい発想による「まちづくり」論を述べている。「地域の個性と価値をセンチメンタル価値＝地域の住民の愛着・Identity」の概念として捉え、愛着、Identityを基本的視座とした「まちづくり」論を主張している。足立氏の「ふるさと意識」を図式化すると<図3>のようになる。センチメンタル価値を経済的価値としてCVM (Contingent Valuation Method) 法 (仮想市場法) を用いて数量的

に計測することにより「地域再生」への具体的政策論を展開する。従来までの市場経済での価値論からの発想を転換して、創造的価値論 (愛着・Identity) を展開する。「ふるさと意識なくして地域活性化なし」の発想である。

③鳥羽都子氏の「まちづくり」論³⁸⁾

氏の「まちづくり」論は、平成28年10月2日(日)、市民活動支援センター (ささえ愛センター) において第45回「ふるさと春日井学」研究フォーラムをテーマ『文化施設を活かした「地域活性化」～長浜市都市構想成功事例を中心に～』で講演された中で述べられている。

春日井市には、市庁舎と並んでモダンで立派な建物「文化フォーラム」がある。市民会館もある。書道博物館「道風記念館」もある。充実した文化施設を擁している30万都市である。「地域活性化」の観点から視たとき、これらの施設を拠点として周辺地域が活性化されていくか否かは、今後の課題である。文化と経済が充分結びついていないのである。氏は、文化を活かした経済効果などについて、



<図3>

足立基浩『まちづくりの個性と価値』(日本経済評論社) (2009) より加工作成

長浜市博物館都市構想と博物館で長浜の「まちづくり」実践をされた経験を中心に文化施設を活かした「まちづくり」論を述べられた。

「公共文化施設を活かした地域活性化」は、文化施設を核とした「地域に創造的環境を生み出す」「地域に創造的環境が生まれる」ための創造的実践と創造的マネジメントが必要である。しかしながら、黒壁を中心とした中心市街地や観光開発は、一定の成果を収めたものの、(株)黒壁が3年間赤字を計上する原因となった拡大路線や、買回り品を扱う他商店との乖離、後ろ手に回った後継者育成、観光エリアになった中心市街地と地域生活との乖離もあり、これらの課題に応える施策のひとつとして博物館の活動が位置づけられた。「博物館都市構想」は、市役所のプロジェクトチームで現地調査や市民との意見交換を行って市民会議を設立したボトムアップ型の構想であった。都市整備とともに、市民意識も重視し、地域の文化や自然を再確認し、発展させることを目指した。地域全体を博物館に見立て、学芸員のように市民がまちを深く理解し、“市民総学芸員”を掲げ、日常の中で絶えず長浜らしい情報発信をしていくために、すべての市民が自らの町の特性を知り、それを誇りにすることで、かけがえのない地域資源としていく。ここに最大の特徴がある。この基盤の上に、1994年「新博物館都市構想」に引き継がれた。新構想は、裾野の広い「協働型まちづくり」を展開する。黒壁だけでなく、多様な主体が参加できる多様な拠点と参加できていない部分をカバーするネットワークを組む課題を掲げた。博物館自身が能動的な働きを行ってこなかったことが、地域乖離・遊離の問題として気づき、むしろ「地域づくりの推進役」としてと、従来の博物館機能に“地域貢献”を位置づけることであると論ずる。1984年の『博物館都市構想』の策定と市民エネルギーが(株)黒壁の設立につながった。(株)黒壁が設立されたのは1988年。

景観形成と新産業創出による中心市街地活性化を行った。長浜市は、歴史を活かした町並み整備やイベントの開催などによって再生を果たした。黒壁は、歴史性を活かしたハード整備と、ガラスに着目し、文化産業による地域求心力の形成を行って中心市街地の観光形成や商店街再生に成功し、長浜といえば黒壁にスポットライトがあたる。地域経営は、地域の固有性を活かし市民の創造的活動を基本におくことが求められている。行政・施設・市民が連携し、文化施設が地域の政策課題に貢献する必要性とは？

そして、文化施設が、地域政策推進の核として、地方自治、市民、NPO、企業など地域構成主体との連携により、相乗的な効果を生み出すことができるあり方とは？「まちづくりの在り方の模索」と「文化施設のあり方の模索」は、有機的・効果的な地域経営のための関係を築くことである。地域と文化施設の現状と課題については、行政・文化施設・地域・市民の各実情にはそれぞれの課題がある。また、それらは、それぞれが独立したのではなく重なり関連しあう。①「行政」では、自立的な地域経営ができているか。縦割りの非効率な行政運営でなく、実情に即した政策形成能力があるか。財政悪化による予算削減を乗り越える行財政改革に取り組んでいるか。②「文化施設」では、ハード先行ではなく、活用システムは伴っているか。政策部門との連携が弱くないか。ただの見学から、市民の主体的・能動的な「交流」の場への志向に向かっているか。連携のための組織、スタッフのスキル開発の体制整備がされているか。③「地域・市民」は、地域社会の衰退とコミュニティ意識の低下の内容はどの程度か。地域アイデンティティの確立、地域文化の再評価につながる創造的環境づくりに挑んでいるか。地域活動への意欲、市民自治力によって帰属意識は高まっているか。以上の現状点検をしたうえで、必要なことは①行政には地域

課題を解決するための効果的手法が求められる。②文化施設には従来の社会教育，持ち込み企画開催を脱することが求められる。③市民には地域参画を促進する仕組みづくりが求められる。以上を踏まえて，地域のリーディング機関となるのは何か。行政内での政策形成は地域密着型になりにくいとし，文化施設の公共性，継続性，創造活動，専門性といった特性が，地域政策の展開に寄与するとして，その潜在的優位性とその理由を4点挙げる。

①地域の文化資源を集積している。②施設・空間・設備を有し，交流活動に適する。③市民や専門家等とのコーディネート力をもつ。④地域を知る専門的人材＝学芸員が存在する。これらを活かした成功例として長浜市長浜城歴史博物館の事例を挙げる。

以上の「まちづくり」論に共通しているのは，地域の特色，魅力を再発見してそれ等を核及び拠点として「まちづくり」をすることを論じていることである。地域の特色，魅力を再発見することは，ベースに地域への愛着と Identity＝「ふるさと意識」がなければならないことも共通の認識となっている。何れの論もまずは実践が前提となって，其の後理論化されるという手法に困っているという点で「まちづくり」論は「論より実践」であることを示している。価値転換を迫られている今日において，今後の「まちづくり」＝「地域活性化」論の方向性を示唆した論と言える。

おわりに

本稿では，市民活動「ふるさと春日井学」研究フォーラムの実践を通じて，「地域活性化」の本質的な原動力となる「ふるさと意識」がどのように醸成され，公的な生涯学習で実践されている個別の研究が「ふるさと春日井学」研究フォーラムのような民間の活動で情報発信することによって，新たな地域貢献への動向がどのような過程で生まれてきたかを試行してみた。その結果幾つかの知見された事例を基に検証す

ることができた。

この試論的实践で明らかになったことを結論としたい。

- ①各ジャンルの講師（発表者）は，その道の地域の専門家である。自らの研究成果を市民に発信することのみならず，そのことが「地域活性化」に活用されてゆくことが自らの研究成果が地域に貢献して行くことに繋がると言うことへのモチベーションは高い。ともすると，従来の「生涯学習」では，趣味や教養講座を受身に学ぶだけという消費的学習に終始しがちであり，自己完結型のものが中心であるが，「ふるさと春日井学」研究フォーラムでは，専門的内容を平易に伝えることで人間的，主体的に意識してもらうことに努めた。内容は学術的であるが，身近にある生活に密着した知識として受け止められて行くことで，「ふるさと意識」の涵養・醸成に繋げ，「地域活性化」の資源として活用されることを目的として実践している。その中で幾つかの「ふるさと意識」による資源活用事例と動向が知見出来た。従って「ふるさと意識」と「地域活性化」との相関関係からは，「ふるさと意識」の高揚がそのまま「地域活性化」の関数関係にあることが幾つかの知見と検証の中で見出された。
- ②多種多様，多能な人材とコミュニケーションをとりながら，「ふるさと意識なくして地域活性化なし」の持論を説きながら，フォーラムの講師を引き受けていただいた方々は地域の各分野組織のリーダーであり，指導的立場にある人達ばかりである。因って，研究されてきたこと，実践されてきたことは，「地域活性化」の重要な「証言資料」として，迫力と説得力に富むものばかりであった。こうした「生涯研究」の事例を発信することにより行政，教育，地域の指導的立場の人達の「意識」の変化が随所で知見出来た。それが，具体的な行動として実践された事例も生まれてきた。「意識が変われば行動が変わる」具体

的な事例も知見出来た。

- ③しかし、課題は多くある。一言に「ふるさと意識の形成」と言っても一朝一夕で行えるものではない。言うまでもなく子供の頃の経験、体験が重要であることを考えた時、学校教育、地域教育の中での「ふるさと学習」が極めて重要であることが解る。「雀百まで踊り忘れず」の喩えを引くまでもなく、子供の頃の「ふるさと学習」体験は「ふるさと意識」形成に大きく寄与することは間違いない。地域社会のなかで、「ふるさと意識」形成に向けての「学習」「研究」の横断的枠組みが行・民・産・学協働のなかで構築されてゆくことだ。「ふるさと意識」は、その地域の歴史、文化、自然を主体とした、市民全体の無形、有形の財産をどのようにまもり、維持保存して次代へ引き継いで行くのかという意識に他ならないわけであるから、そうした基本的発想の中で、行政は、地域（市）の将来ビジョンを策定して行くことが望まれる。「まちづくり」の原理、原則は、住民が主役であること。人権が保障されること。自然と共生できること。地域の住民が地域の仕事で生活できるよう再構築すること、³⁹⁾地域の資源を磨き、価値を創造すること、⁴⁰⁾といった先学の言葉を噛みしめながら「地域活性化」は進められなければならない。

市民活動「ふるさと春日井学」研究フォーラムの実践は、まだ、途上であるが、解ったことは、情報発信すれば必ず好むと好まざるに関わらず意識され伝わり、確実に伝播波及してゆくということが確認できた。今日の情報社会（インターネット）はその速度を速めてくれている。その意味において、この実践が、「地域活性化」の促進的役割を担っていることを実感できた。そして、「ふるさと意識」が「地域活性化」の源泉であると共に原動力であることも明らかになったと同時に、今日的な社会経済の動向のなかにも大きな「価値転換」を予兆させる潮流と幾つかの「意識」の変化を「ふるさと意識」の抽

出検証の中から見出すことが出来た。因って、「ふるさと意識」の醸成と涵養の実践を有形無形の力としてゆくことは、「地域活性化」にとって極めて重要な意味を持つものであり、新しい価値観による地域共通の目標の下で、多様な地域との関わりを構築してゆくことが今後の課題である。『「ふるさと意識」なくして「地域活性化」なし』は、「まちづくり」「地域活性化」の大前提とならなければならないことを結論としたい。

参考文献

- 1) 石井吉春『ふるさと意識をどのように地域づくりに活かすか—「ふるさと納税」制度の課題を考える—』<http://homepage2.nifty.com> (2017年10月15日アクセス)
- 2) 2012年8月25日付発表「国民生活に関する世論調査」(内閣府)、武田晴人『脱・成長神話—歴史から見た日本経済のゆくえ—』朝日新書(2014) 藻谷浩介『里山資本主義—日本経済は「安心の原理」で動く—』角川書店(2013) 橋木俊詔『新しい幸福論』岩波新書(2015) 参照。
- 3) 月尾嘉男『縮小文明の展望—千年の彼方を目指して—』東京大学出版会(2003) 参照。月尾嘉男監修『環境共生型社会のグランドデザイン』NTT出版(2003)年参照。月尾嘉男『情報社会のまちづくり—百年単位の目標転換—』「ふるさと春日井学」研究フォーラム講演(2015.4.5)『会報—特集号—』(2015.4.5) 発行所収 <http://kasugai.genki365.net/>
- 4) 羽賀 登『地方史の思想』NHK ブックス(1972) 282。
- 5) 長野大学産業社会学部編『グローバル時代の地域と文化』長野大学産業社会学部 1999年参照
- 6) 色川大吉『東北の再発見—民衆史から読み直す—』河出書房新社(2012) 35—36
- 7) 安部耕作「生涯学習から生涯研究への展開—「船岡塾」における生涯研究の実践事例の考察—」『日本産業科学学会研究論叢第19号』所収(2014.3.31) 参照

- 8) ふるさと豊島を想う会事務局長溝口禎三『文化によるまちづくりで財政赤字が消えたー都市再生豊島区編ー』めるくまーる (2011.6) 参照.
- 9) 平野 真「アートによる地域活性化ー新たな地域経済創出への方法論としてー」『四国の大学と四経連による四国学』所収 (2011.12) 参照
- 10) 「ふるさと春日井学」研究フォーラム『会報 6』 (2013.8.13) <http://kasugai.genki365.net/> 安部耕作「近江八幡市民のふるさと学習に関する考察」(『日本生涯教育学会論集 28 2007 年度』日本生涯教育学会所収 (2007.7.31) 「近江八幡市の「ふるさと学習」と地域活動の焦点ー学習成果の活用と子供への取組を軸にー」(『日本生涯教育学会論集 35 2014 年度』日本生涯教育学会 所収 (2014.9.30) 「生涯学習・キャリア形成支援の効果的展開のための視点の検証ー滋賀県と近江八幡市の相互互惠関係事業を軸にー」(『日本産業科学学会研究論叢 第 19 号』所収 (2014.3.31) 参照
- 11) 石原武政「まちづくりのリーダーシップ」(企業家研究フォーラム『企業家研究 第 5 号』 (2008.6) 所収 角田隆太郎「まちづくりと企業家」(企業家研究フォーラム『企業家研究 第 5 号』 (2008.6) 所収 伊澤知且「まちづくりのリーダーシップーまちづくりの現場からー」(企業家研究フォーラム『企業家研究 第 5 号』 (2008.6) 所収参照
- 12) 色川大吉『前掲書』136.
- 13) 高橋碩一『高橋碩一著作集 10 流行歌でつづる日本現代史』あゆみ出版 (1985) 参照. 成田龍一『「故郷」という物語ー都市空間の歴史学ー』吉川弘文館 (2005) 1ー17
- 14) John Ruskin「芸術経済論」世界教育学名著選 内藤史朗訳ラスキン『芸術教育論』明治図書刊 (1974) 61ー150 川勝平太「富の再定義ーマルクスからラスキンへ」『富国徳論』紀伊国屋書店 (1995) 所収 83ー117
- 15) 池上 惇『文化経済学のすすめ』丸善ライブラリー (1991) 3ー23
- 16) マイケル・サンデル『それをお金で買いますかー市場主義の限界ー』早川書房 (2012) 参照
- 17) 神谷秀樹『強欲資本主義ウォール凱の自爆』文藝春秋 (2008) 参照
- 18) 増田寛也『地方消滅』中央新書 (2014) 参照
- 19) トマ・ピケティ (山形浩生・守岡桜・森本正史訳)『21 世紀の資本』みすず書房 (2014) 参照
- 20) 高橋碩一『前掲書』330
- 21) 『福澤諭吉著作集第 7 巻』慶應義塾出版会 (2003) 85
- 22) 23) 河地 清『福澤諭吉の農民観ー春日井郡地租改正反対運動ー』日本経済評論社 (1999) 75ー101, 137ー170
- 24) 春日井市ホームページ参照 (<http://www.city.kasugai.lg.jp/>)
- 25) 松河戸誌研究会編『研究収録 保存と顕彰の歩みー松河戸小野道風公遺跡ー』 (2008) 3
- 26) 「ふるさと春日井学」研究フォーラム『会報 16』 (2014.6.20) <http://kasugai.genki365.net/>
- 27) 金子 力・工藤洋三『原爆投下部隊ー第 509 混成群団と原爆・パンプキンー』2013.8.1 参照.
- 28) 「ふるさと春日井学」研究フォーラム『会報 12』 (2014.1.20) <http://kasugai.genki365.net/>
- 29) 『「魅力ある事業環境で、市内外から選ばれるまちへ」の推進エンジン春日井市産業振興アクションプラン』春日井市発行 (2014.3) 18
- 30) (29) に同じ) 49
- 31) (29) に同じ) 29
- 32) (29) に同じ) 47
- 33) (29) に同じ) 34
- 34) (29) に同じ) 49
- 35) 「ふるさと春日井学」研究フォーラム『会報 4』 (2013.6.10) <http://kasugai.genki365.net/>
- 36) 田村 明『まちづくりの実践』岩波新書 (1999) 第 2 章「地域の価値発見」53ー89.
- 37) 足立基浩『イギリスに学ぶ商店街再生計画ー「シャッター通り」を変えるためのヒントー』ミネルヴァ書房 (2010) 参照『まちづくりの個性と価値ーセンチメンタル価値とオプション価値ー』日本経済評論社 (2009) 58ー63
- 38) 鳥羽都子・織田直文『文化経済学会・文化経済

学 第5巻第4号』(2007.9) 所収「まちづくりに関わる一主体としての文化施設に関する研究—滋賀県長浜市のまちづくりに関わる長浜城歴史博物館事業の分析から—」鳥羽都子『四神の書—比田井天来門下四書家の足跡を辿る—』四神の書発行委員会発行 (2015) 112 「ふるさと春日井学」研究フォーラム『会報NO 45』(2016.10.25) <http://kasugai.genki365.net/>

39) 本間義人『地域再生の条件』岩波新書 (2007) 第12章「まちづくりの目標と条件」357-383.
40) 田村 明『前掲書』第2章「地域の価値発見」53-89

An Essential Method for Local Revitalization
—Furusato Kasugai Studies in Practice—

Kiyoshi Kawachi

Abstract

What are the basic concepts of “regional development” / “local revitalization”? How are “Furusato” concept and “local construction / “local regeneration” related? How are the traditional concept of “community renovation” based on new ideas different? Many precedent case examples and studies have been presented to date regarding the “local revitalization” methods. Formulated practices or theories, however, have not been proposed. It is not possible to formulate “local revitalization” methods using only traditional economic theories. Because it is essential to consider the “local revitalization” problem on the foundation of set of values that can grasp the history, culture, and nature of a particular region comprehensively, with the fermentation of spontaneous consciousness (Furusato consciousness) among the people in the region. This paper is a practice report that hypothesizes essential methodology of “community renovation, “which is based on the prerequisites of “community renovation” such as evidences, practical knowledge, and validation acquired through the hand-on civil activities, “Furusato Kasugai studies” research forum.

Key words : “Without “Furusato” consciousness, without area activation” Area activation “Furusato” science Causing of “Furusato” consciousness

